



ヤンデレ企画

ヤンデレ企画について

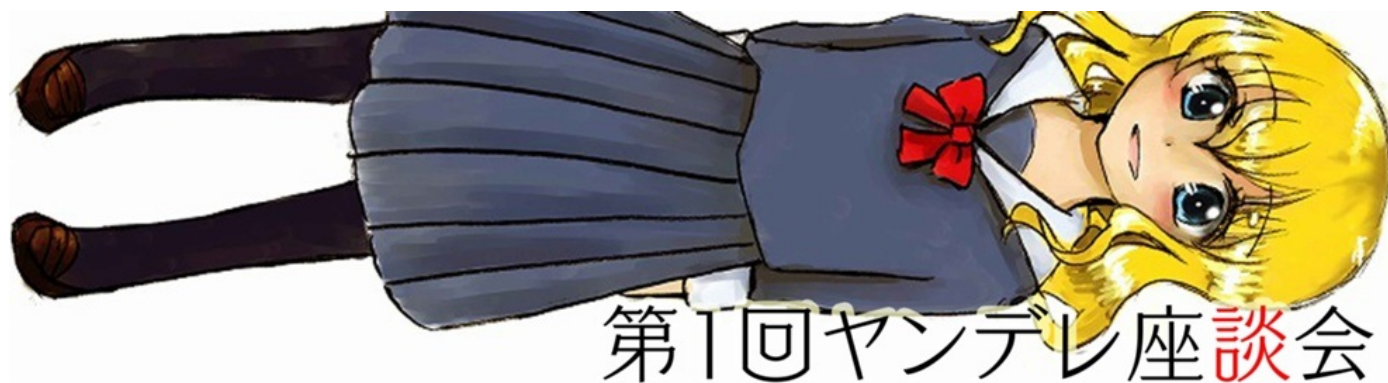


「ヤンデレ企画」は、
2013年12月12日～2014年6月29日の間、
サークルKMITのweb企画として行われました。

ヤンデレについて意見を交わす「ヤンデレ座談会」や、
「ヤンデレ」という言葉からインスピレーションを受けて書かれた「ヤンデレ小説」、
ヤンデレからイメージしたイラストをweb上で掲載しました。

本誌は、
ヤンデレ企画にて掲載されたすべてを載せています。

この本を開いてくださった皆様、
どうぞ心ゆくまでヤンデレの世界をお楽しみください。



2013年11月27日水曜日

学食二階にて16時半より行われた座談会。

テーマは「ヤンデレ」。

《メンバー》

藍那（編集長）

ゆう（編集部）

城野（ライター）

明鏡（ライター）

らいち（ゲスト）

ゆず猫（ライター、宣伝部）

長月（宣伝部、ライター）

野中（ライター）

藍那：彼女に刺されたい人に贈る珠玉の短編集 ※1

城野：素直に「はい」とは言えないんだけど(笑)

ヤンデレ座談会 開始

藍那：まあみなさんご存じだとは思いますが、最近まわりで、非常に「ヤンデレ」という語、飛び交いますよね

城野：「メンヘラ」の方が多のかな...

ゆう：それは文芸島だけかなー ※2

藍那：最近ポップな話題ということで(笑) ちょっとね、皆さんで話し合いたいと思います

※1 彼女に刺されたい……「彼女に愛されたい」の意。

※2 文芸島……日芸文芸学科生が迷い込むと言われる空想上の場所。

①ヤンデレとは

ゆう：まず、「精神的に病んだ状態」というのが第一前提ですよ

城野：さっき君ウィキペディアで調べてなかった？

ゆう：うんだからそういうことが書いてあった

城野：僕がきいたところは、体が病んでいる状態もヤンデレというらしいけど

ゆう：病んでいればいい、というのが一応広義では

城野：じゃあ病にかかっていればいいってことなのかな

藍那：じゃあ風邪でもいいわけ？

らいち：イメージ的に精神的なのが多いよね

ゆう：うん、精神的なのが「ヤンデレ」だとは思う

城野：まあ定義的には「病んでいる」ってのが一応だけど、
.....まあここで話し合うべきは、皆さんの中での定義かな

藍那：じゃあ順番にきいていこうか、奥の席から

野中：じゃあ、さっきの定義に賛成です(笑)

明鏡：なんか二つあるかなって思うんだけど、もともとメンヘラの人が恋している状態？

ゆう：それはメンヘラじゃない？

明鏡：いや、相手に対する言動とかの面ではってことで.....。

もうひとつは、もともと正常.....って言い方もあれだけど、病んではなかったんだけど、愛しすぎるあまり.....みたいな。

愛していくうえで、支配欲とか独占欲とか強くなってしまって

ゆう：そんで精神病を患う、みたいな？

明鏡：そういう、変質的になるというか

藍那：単体では病んでないってことなのか。恋愛みたいに、他者との関係が発展すると、病むんだ

ゆう：他者依存の形で、精神病に近い状態になる、と

城野：かわいいのがヤンデレかわいくないのがメンヘラ（断言

ゆう：いやーもーねーそれは真理だからやめとこ

城野：あ、はい(笑)

ゆう：メンヘラは害悪だけどヤンデレはかわいい

ゆず猫：どういう意味でかわいいの、内面的な問題？ 行動とか？

ゆう：いやーあのねえ……

城野：まだ(笑) まだ置いておきましょう(笑) 全員の話のをきいてからで(笑)

藍那：私……？ 私は別に……かわいければなんでもいいというか……

城野：はい次行きましょう（真顔

長月：あ私は明鏡ちゃんと同じで

……恋愛していくうちに、相手のことが好きすぎて、病んでいく感じ、かな

ゆず猫：「他者依存」って言葉が、私の中では一番しっくりきて……うん

ゆう：そうだね、それは間違っていないね、他者依存だね

城野：いやーてっきり「刺してくれるのがヤンデレ、刺してくれないのがメンヘラ」っていうのかと……

ゆう：言い直します。刺してくれるのがヤンデレ、刺してくれないのがメンヘラ（迫真

らいち：えー……まあ、……愛が深い人がヤンデレ？

感情表現が豊かな人というか、愛ゆえに病んでしまうというか……

とにかく、愛がないとヤンデレにはならないと思うし、だから、ある意味で、究極的に人を愛せる素晴らしい人たちじゃないですかね(笑)

——一同、爆笑

②メンヘラとの違い

ゆう：えっとね、さっきまとめてたんだけど……メンヘラは、自分が可愛い人かな。

自分が可愛いから、まわりを認められない、まわりを攻撃する。

ヤンデレは逆かな。

さっき言ったように、他者に依存しているから、相手の障害を取り払う……それも自分の解釈だから、結局はひとりよがりなんだけど

野中：イメージだけど、メンヘラは割と誰でもなり得るけど、ヤンデレは

ゆう：他者に依存しているから、一対一なんだよ。メンヘラは、「自分のこと」なんだよ。

城野：確かに、ヤンデレの方がサイコパス的なイメージはあるよな。

メンヘラは、普通っていう枠のなかで狂っている感じがするけど、ヤンデレはそうじゃない

ゆう：メンヘラはそうにしかねない。

まわりが構ってくれることを知っているし、だから、たまに構ってもらえない時に、すごい自分の衝動とかを抑えられなくなる。

明鏡：え、じゃあ「ファッションメンヘラ」は？ ※1

ゆう：そういう風にみえるんじゃないかな。

例えば、本当のメンヘラだったら、認められないことで、人を殺しちゃったりするかもしれない

城野：邪魔なやつとかを

ゆう：でもファッションメンヘラだったら、そういうことはしない。まあ、重度か軽度かってとこなんだろう

城野：ファッションメンヘラって言葉も怪しいところがあるけどね

ゆう：ファッションメンヘラって言うてる人はメンヘラだと思う。

そうやって区別してるってことはさ。メンヘラじゃなかったら、自分が重度か軽度かって分からないはずじゃん。

明鏡：そうなんだー。

なんか、どういう心境状態が分からずに、「どうせこういう風について構ってほしいだけだろ」って、別にメンヘラでも何でもない人が、決めてかかってつけた名称かと思った

ゆう：ああ、でもそれもあるかも知れないな。

一般の人からみたら、そういう人はすごくうぜえし、……いるじゃん、よくさあ、ツイッターとかで色々言ってる人とか……

城野：（ファッションメンヘラは）かまってちゃん、なのかな

ゆう：ツイッターみたいな公の場で色々できる人ってさ、完全におかしいよね

——一同、唸る

城野：先生……今日はぶっこみますね(笑)

ゆう：いやだってそういう日じゃないの？（真顔

城野：いや大変おもしろいですけど(笑) まあ、「価値観の統一」が今回の座談会の目的だからね

ゆう：他にも色々テーマあったから、まだいいかなって

城野：じゃあまわしていこうか

※1 ファッションメンヘラ……メンヘラを装っている人。自分の意志でメンヘラ状態をやめられる人。

③ヤンデレといえは？

藍那：「ヤンデレ」といって、何を想像する？みたいな

明鏡：作品とか？

らいち：アイテムとか状況とか？

藍那：作品に関してはまたあとでやるからいいとして

ゆう：なんらかのワードとか？

藍那：うんそれでいい。まわしていきましようか

野中：パスで(笑)

明鏡：ナイフとか、監禁とか……あとカニバリズムとか。食べたいくらい愛してる、みたいな(笑)

※1

ゆず猫：カニバリズムかあ……

明鏡：まあね(笑) また別かもしれないけど

城野：まあカニバリズム、とか性的倒錯とかも僕は病だと思ってますんで、
ヤンデレの一形態ではあるんじゃないかと。ヤンデレ亜種みたいな(笑)

明鏡：「好きすぎて刺す」と「好きすぎて食べる」は似ていると思うんだけど

ゆう：うん、よく似ていると思う

城野：途中経過だからね。

ヤンデレって状態の後に人を殺してしまったらそれは殺人鬼だし、食べてしまったらカニバリズムだし

ゆう：そんで捕まるわけじゃん。

そしたら、終わりのわけだよ、ヤンデレは。（刑務所から）出てきたら、また普通の人生を歩めるかもしれないし、もしかしたらまた、そういう（ヤンデレを向ける）対象を見つけるかも

しれない。

城野：ヤンデレって言ったら、ナイスボートしか出てこないんだけど……。

お腹の中にだれもいないのかーみたいな……(笑)

あとは空鍋かなー。

「School Days」というエロゲが昔ありまして、そのアニメ化に際して、ハッピーエンドもあったんだけど、あえてそのアニメは最悪のバッドエンドを選びまして…… ※2 ※3

ゆう：エンディング確か何個かあるんだけど、全部主人公が死んで終わるんだよ

藍那：ヤンデレ系のゲームってこと？

ゆう：そうそう。主人公もまたクズでね……

城野：二股、三股、……四股、かな(笑)

それで、正ヒロインと準ヒロインに取りあわれて、最後正ヒロインに殺されて

明鏡：そりゃ殺されるわ(笑)

城野：その遺体を持って、正ヒロインが準ヒロインに会いにいったら、

準ヒロインの子が「妊娠している」って嘘をついてたから、正ヒロインが準ヒロインの腹をかっさばいて、「中に誰もいないじゃないですか」って言って終わる、っていうエンドもある(笑)

———同、感嘆

ゆう：まあまあ……

それに関してはあまり評価する点はないんですけど、「ヤンデレ」っていうのがすごくメジャーになった要因ではある

城野：アニメの最終回は放送禁止になったからね(笑)

そう、最終回をテレビで流そうとしたら、突然画面が切り替わって、「今不自然な映像が流れました」つつってボートの映像が流れるっていう。そのことを「ナイスボート」っていう…

…ボートさんよく隠した！みたいな(笑)

空鍋もエロゲなんだけど、ヤンデレな妹が、ちょっと幻覚を見ちゃってて、お兄ちゃんの帰りを待ちながら、空鍋をこう、かきまぜる（動作をする）っていう、ちょっとやばいやつ(笑)

はい次どうぞ

藍那：かわいい女の子しか思いつかない

——一同、「可愛いは正義！」

城野：はい、次

長月：重い愛……かなあ。それくらい愛されたら幸せだろうなあ……

藍那：感想(笑)

長月：相手が刺したいと思うのはヤンデレでしょ？ 刺されたいって思うのは……？

城野：なるほど、刺されたい側は病んでるか否か

ゆう：病んでるよ。何言ってんの。

城野：うんととても病んでるよ。

ゆう：うーん、いるかな、刺されたい系ヒロインはいる。

ヒロインではないけど、クラリーベルっていう人がいる。めっちゃ好き ※4

——一同、笑

ゆず猫：独占欲かなあ。相手を全部独り占めしたい、とか

ゆう：夢、ですね

——一同、戦慄

らいち：二次元キャラのイメージが強いかなあ。

あと、ヤンデレ的な行動が出来る人って、スペック高いイメージ。それをなしえる行動力が。ストーカーとかも、「全部知ってるよ」みたいなのが出来るってことは、それだけ技術があるってことで。

思いつくのは、「未来日記」のヒロインとか、表の顔と裏の顔を使い分けてるっていうか ※

城野：やっぱり頭がいいよね

らいち：ヤンデレって、ばれたら違う、というか

城野：やっぱりサイコパスなんだよなあ

らいち：犯罪者に見えないレベルがヤンデレ

城野：「悪の教典」かなあ ※6

らいち：あとは、女の子のイメージが強いかな

ゆう：その方がかわいいもんね

らいち：男のヤンデレも一応あるけど

城野：優秀な女性っていうのは魅力的だよな

ゆう：なるほど、優秀さか

らいち：いやでもかわいいイメージじゃない？

ゆう：でもかわいくてもダメダメだったら……

城野：言葉(ことのは)たんの話はやめるんだ(笑) ※7

野中：パスのパスで(笑)

-
- ※1 カニバリズム……食人。人間が人間の肉を食べる行為。
 - ※2 空鍋（からなべ）……同名のゲームを原作とするアニメ「SHUFFLE!」に出てくるワンシーンの呼称。
 - ※3 「School Days」……同名のゲームを原作とするアニメ。
 - ※4 クラリーベル……ライトノベル「鋼殻のレギオス」に出てくる登場人物。
 - ※5 「未来日記」……マンガ作品。アニメ化もされている。
 - ※6 「悪の教典」……小説作品。ドラマ化もされている。
 - ※7 言葉(ことのは)たん……「School Days」に出てくるヒロイン、桂言葉（かつらことのは）。

④ヤンデレのルーツとは

——一同、「ルーツ!？」

ゆう：サロメじゃない？ キリスト教の聖書に出てくる。 ※1

サロメが、有名な踊り子だったんだけど、報酬として洗礼者ヨハネの首を要求するんだよ

らいち：サロメの母親が、サロメに「あの人（洗礼者）邪魔だから、報酬として（領主に）あの人首をねだりなさい」って言ったんだよ

ゆう：で、サロメは結局その首を手に入れるわけじゃん。

これは聖書じゃなくて、なにかの短編なんだけど、それによると、サロメはその首を大事にしておくんだよ

らいち：絵によく描かれるのは、「サロメの接吻」とか、お盆の上に首をのせて、顔に接吻したり

城野：セルティかな ※2

らいち：それは違うんじゃない？

城野：でもイメージの話としてさ。デュラララの中にも首を愛している男の子がいたなあって

らいち：でも、（サロメは）首だからじゃなくて、彼だから、首でも大丈夫みたいな

城野：まあルーツの話はそんな感じで

※1 サロメ（ヘロディアの娘）……新約聖書に出てくる人物。

※2 セルティ……ライトノベル『デュラララ!!』(DURARARA!!)に出てくる登場人物。アニメ化もされている。

⑤ヤンデレ文学について

藍那：ここで一応、ヤンデレ作品関連の話題を、とと思ってましたが

ゆう：まあメジャーなのはさっきいった「School Days」。あとは「SHUFFLE!」っていうギャルゲーが ※1

城野：これが「空鍋」ですね.....

ゆう：この二つはほんとに、その手の論文とかにも取り上げられるっていう。

その一、「ヤンデレ大全」っていう本がありまして..... ※2

城野：お前ヤンデレ研究しすぎだろ(笑)

ゆう：オタク文化に関する本でも、その二つがけっこう取り上げられるんだよね

城野：あとは一、執着愛っていう枠であげるなら、「まどマギ」もなかなか..... ※3

らいち：ほむほむだね ※4

城野：「魔法少女 まどか☆マギカ」という作品がありまして、まあ今は有名ですよ。

その中に、暁美ほむらという女の子が出てきまして、.....これは完全にネタバレになるんですけど、話しても大丈夫ですか

藍那：うん

城野：まあ、世界をループしているわけなんですよ。 ※5

ある少女、主人公の鹿目まどかを、救える世界に行くために、何度も何度も世界をループしている、という。ここで重要なのは、暁美ほむらさんにとって鹿目まどかが、すごく大事なんですよ(笑)

ゆう：ほむらちゃんは、まどかを救うために、

まどかが幸せになれないエンディングをもたらすやつを殺したりする.....銃とかも使って.....

城野：でも、二人の関係って、ただのクラスメイトなんだよね。

ほむらが学校に復帰してきて、はじめに話しかけてきたのがまどかだった、ていうそれだけなんだよ。.....ほんとうにただそれだけなんだけど、ほむらはずっとそれを覚えていて.....

ゆう：ほむらちゃんからすると、まどかしか友達がいな位な感じだけど

城野：で、失敗しちゃって、まどかが死んで、

ほむらちゃんが「まどかが死ぬエンディングなんて許さない」つつって、世界を戻して、また同じようなことを繰り返すわけですよ。だから最初は本当に友達程度の関係だったんだけど、ほむらだけ何度も世界をループするもんだから、自分の中でだけ、関係が進展してるんだよ

ゆう：まどかは当然それを知らなくて、さらに、

なんか「出会い」がだんだん変質してくるんだよ。あの方ほうはもう、あんまり仲良くないんだよね

城野：そう、まどかからすれば全然仲良くないやつが、自分のことを救おうとしてる、っていう状態になっていく

ゆう：すごく怖い話ではあるよね……

城野：最後はもう……

らいち：彼女のためだったらなんでもする、みたいな……

——一同、感嘆

らいち：例え自分が嫌われても、みたいなね

明鏡：経過は違うけど、助けるためにループしてる世界で、自分が死ぬ、みたいな。シンジ君を助けるために…… ※6

城野：ああ、カヲル君？ カヲル君はヤンデレだね ※7

ゆう：ループしてるってのは、なにか目的を果たすために過去を改善しているわけだから、

城野：それはイコール執着だよな。そうか、「エヴァンゲリオン」もそうだし「まどか☆マジガ」もそうだし、……ループものは兎角、ヤンデレと関わりが深くなるなあ

ゆう：「文学」っていうと……ラノベとかは違う？

藍那：ラノベでもいいよ

ゆう：さっき、「自分が刺されたい」という時に出したんだけど、

「鋼殻のレギオス」という作品に、クラリーベルっていう子が出てきて、その世界って外的と戦わなければならないんだけど、その、戦わなければならない外的側の、エリートの一族の子で強いんだけど、クラリーベルは、主人公に殺されたいっていう欲を抱くのね。

主人公に勝ちたいって言ってるけど、まあそういう仲間のなかでは勝ちたいって思っている。でも、主人公は、エリートのクラリーベルより全然強いよね。だから、クラリーベルちゃんのことには相手にもしないわけよ。

戦闘するシーンが一度だけあって、クラリーベルが主人公を殺そうとして、剣を振りかぶるんだけど、でも主人公の方が全然早くて、で、手を斬られちゃうの。手を斬られたら戦えなくなるじゃん。

んで、斬られた手を見て、クラリーベルが頬を紅潮させて、「これだ」と言うの ※8

城野：「これだ」じゃねえ(笑)

ゆう：主人公からみれば全然、クラリーベルは、塵に等しい存在なんだよ。これは、ヤンデレかな

城野：うーん、自分と相手だけの世界で完結しているならヤンデレなんだろうなあ。

そこで、ヤンデレが第三者の目を意識し始めると、メンヘラかなあ

ゆう：第三者？

城野：まあ、ツイッターは多数だしさ、なんだろう、二者のみの世界観ならヤンデレなんじゃない？

ゆう：他人が知らなくてもいいっていうのはヤンデレだと思う。他者を必要としないっていう。メンヘラはそうではないよね。

城野：まあ、作品を挙げていけば、キリがないかな(笑)

明鏡：BL系もけっこうヤンデレ多いよ

城野：BLの純愛はヤンデレだな

ゆう：BL自体が性的倒錯だしね

明鏡：さっき「二人だけの世界」って言ったけど、私が読んでるのは、二人だけだと、お互いに「壊したい」「壊されたい」って思っているから、二人で完結してるけどなんか寂しい、というか、だから見ていてくれる第三者が出てくるんだけど

城野：それは、メンヘラじゃない？

明鏡：いやでも、三人目を入れて、二人の関係を維持して、完結してるから

ゆう：ああ、二人の関係を維持したいがために第三者を、ってことなら、ヤンデレじゃない？

城野：そうだね、それで完結しているならヤンデレかな。「第三者」が「他多数」になってしまったらメンヘラかもしれない

明鏡：でも第三者との関係は、親愛っていうか……

ゆう：それは、ほむらちゃんもさ、まどかとの関係は、一応、「友情」という形をとっているから(笑)

城野：友情だね！友情だよ！（念押し

※1 「SHUFFLE!」……同名のゲームを原作とするアニメ。

※2 「ヤンデレ大全」……書籍。

※3 まどまぎ……「魔法少女 まどか☆マギカ」の略称。
原作は漫画作品、のちにテレビアニメ化、映画化もされた。

※4 ほむほむ……「魔法少女 まどか☆マギカ」に出てくるヒロイン、曉美ほむらの愛称。

※5 ループしている……タイムトラベルを題材としたSFのサブジャンルを「ループもの」と呼ぶ。
物語の中で登場人物が同じ期間を何度も繰り返すような設定を持つ作品のこと。（wikipedia参照）

※6 シンジ君……「新世紀エヴァンゲリオン」の主人公、碇シンジ（いかり シンジ）。

※7 カヲル君……テレビアニメ「新世紀エヴァンゲリオン」の登場人物、渚カヲル（なぎさ カヲル）。

※8 「鋼殻のレギオス」……ライトノベル作品。

⑥ヤンデレのキャラ性

ゆう：ヤンデレのキャラ性 #とは

城野：ヤンデレのキャラ性 #とは

藍那：この座談会後にさ、

ヤンデレを扱った作品を書かなきゃならないわけで、だからさ、今みなさんヤンデレの知識を深めましょうみたいな会をやってるわけでしょ？

つまり、これからヤンデレを自分で描いていかなければならないじゃない

城野：どういう風な描写をすればヤンデレのキャラ性になるのか、みたいな？

藍那：まあそんな感じ

らいち：どういう描写って？

城野：どういうキャラ性をヤンデレと指すか、だから、まあ、一途なキャラクターじゃない？

ゆう：でも体面は保つ

城野：体面？

ゆう：その方がいいんじゃない？まわりにはばれないようにする、とか……

城野：そうじゃないんだよなあ……体面は保たないよやつらは

らいち：てか法律とか関係なしに行動するから

城野：相手と結ばれるために、

効率のいい道を選び続けるというか、用意周到というか。

より効率的なのは、周りに溶け込むことだから、体面を保つけど、それが効率的ではないと判断したなら、関係ないというか

ゆう：目的が「相手と結ばれること」だから

城野：それ以外のことをすべて手段と考えている人かなあ

らいち：あとは「かわいさ」とか

ゆう：読者がかわいいと思えるキャラ性は欲しいかな

城野：ヤンデレを描く時に、

第三者が必要かは話といたほうがいいんじゃないかな？

今の話の流れでは、第三者は必要ないらしい、というのがわかったんだけど、じゃあ全てのヤンデレを扱った作品に、登場人物は二人しかいらんないかって

ゆう：いや居てもいいと思うよ。効果として使えば？ それこそ踏み台とか

らいち：その愛の形が、その世界で異常であるということが分かればいいんじゃない？

城野：ああなるほどね。普通の人間を一人置いておくってことか。

らいち：そうそう、その世界の常識となるものがあって、そこでのヤンデレとは、みたいな

ゆう：でもそれは絶対必要なわけじゃなくて、現実世界なのだったら、二人の異常性は伝わるし

城野：第三者の必要性についてはね、

話を出しておかないと、全員が二者しか登場しない作品を書いてくるんじゃないかって思ったので(笑)

らいち：ヤンデレ作品は、なんか基本恋は成就しないっていうか、二人の愛の比重が違う感じがするっていうか

ゆう：だから失敗する、世間的に見れば失敗するんだよね

城野：ああ、恋が成就しちゃうってのは、幸せなことではあるとは思うんだけど

ゆう：でも成就させるのもありだと思うよ

らいち：成就って、相手が折れたパターンなの？

城野：それは違うかな

らいち：じゃあ、受け入れる？

ゆう：うん、受け入れるのもそうだし、相手もヤンデレだった、ていうか

城野：両方ヤンデレって感じになるのかな

明鏡：病んだ愛され方したい、みたいな？

ゆう：もしくは、相手が一般人だけど、まだ、相手の特異性に気付いていないっていう状況、
で（物語を）終わらせる、
ていうのもありなんじゃないかな。まあいつかは破綻するだろうけど

城野：禍根が残る終わり方ではあるけど、すっきりしないって感じが.....それがいいのもあるかもしれないけど

明鏡：じゃあ、「絶対気付かせないよ」っていう決意で終わる、みたいな

らいち：気づかせないってことはつまり、
自分の手の内で終わらせてやる、っていう.....コントロール下にあるって感じなんじゃないかな。
だから、結局は自分のものにはなっているんじゃないかな

ゆう：すべてを掌握していることになりますからね

藍那：ヤンデレってさ、例えば、殺したことを達成したあとも、ヤンデレなの？

城野：捕まる(笑)

藍那：まあまあ(笑)

城野：言いたいことは分かる(笑)

ゆう：俺は一、捕まって、出所したあとに、
また新たなターゲットを見つけるなり、もしくは、自分が間違ってたって気づくと思う

城野：刑務所のなかで？(笑) 肯定しちゃう感じか

藍那：現実的な話なんすね(笑)

ゆう：でも「ひぐらし」にはそういうシーンがあって、 ※1

レナちゃんがヤンデレでしたけど、最後テロして爆発して終わるエンディングと、警察に助けられて、レナちゃんが捕まって、まわりの子たちは逃げて、

城野：罪滅し編だっけ？

ゆう：そう。その時に、刑務所から出所して、普通になる。んで、普通に話す

城野：なににせよ、罪滅し編は更生エンドだったよね

ゆう：もともとあれは、頭おかしくなったのが、

病原菌によるものだったから、だから、幻覚とかあったんだよ。だから精神病かな、一応。まあ病んでる状態には間違いないんだけど、それは、病気がなくなって、治る

城野：それは読者としても納得がいくよな。

もし理由がなくてヤンデレだったら、てめえ何更生してんだよってなるけど、病気っていう何か病気を作れば、そういうのもありかな。

ゆう：病はやっぱり治るかもしれないものだから、治ることもなくはないんじゃないかな。

城野：治ったヤンデレかあ、割と書いてみたいなあ。

ナイスボートのあとかあ、無人島にでも着いたのかなあ(笑) ※2

——一同、笑

城野：いや、ナイスボートのあとに実際本編見たら、

主人公の首を持って正ヒロインがボートにねっ転がってて、「ずっと一緒だよ、誠くん……」って言って、去っていくっていう……。

結局ボートじゃねえか！ みたいな(笑)

藍那：治る……てか、ヤンデレって病気なんすか？

野中：生まれ持った性質的な？

藍那：依存は一生依存じゃん

城野：ヤンデレとはサイコパスのことだ、とすると、そうだね。治るってのはちょっと違うかな

※3

ゆう：サイコパスってさ、他者に依存とかするの？

城野：依存はしないかな。あでもするサイコパスもいる

ゆう：そうなんだ

城野：ある種サヴァン症候群みたいなものだから ※4

ゆう：どうなるかは分からないのか……どうだろう、実際そういう人っているのかな

城野：実際、となると分からないけれど

ゆう：まあいると仮定して……。

他者依存する人間がいるとするじゃん。いつそれに気づくと思う？

気づけなかったとして、いつからその依存がはじまると思う？

城野：自分が他者依存しないと生きられないって気づいたら、（他者依存）すると思うよ

ゆう：気づいて、する？

城野：うん。サイコパスならね。

そして、そのためにもっとも効率的な方法を選ぶ。それが柚乃ちゃんみたいな感じかな ※5

ゆう：それまではどうなのかね、普通なの？

城野：普通なんじゃない？ ある程度は浮いてるかもしれないけど、異常ではない

ゆう：でもサイコパスってさ、なにもボロがでないわけではないじゃん

城野：もちろん

ゆう：じゃあさ、相手に依存することに失敗するとする、殺す、捕まる、そんで出所する。……

また依存するかな？

城野：うーん。まあ、「悪の教典」ではそういう話があったね。 ※6

ネタバレになるけど、先生がサイコパスで、生徒全員を皆殺しにするって話なんだけど、最後、皆殺しにしたはずの生徒のなかに生き残りがいて、でその教師が最後捕まる。

でも、その教師は、自分がサイコパスであるふりをする。「“私は精神異常者ですから、こんなことやってられませんよ”っていう悪魔の声がきこえたんだ」って言って、終わる。だから、そいつは（刑務所から）すぐ出てくる。

そんで、また新しいことやるぜ相棒って悪魔がささやいて終わるんだよね。だからそういうことだよ。

あいつらは、サイコパスのふりをして、効率よく出てくるし、効率よくまた楽しいことをはじめる、と。

ゆう：そっかー

城野：だから、サイコパスは更生しないかな

※1 「ひぐらし」……「ひぐらしのなく頃に」。同人ゲームを原作とし、アニメ化、実写映画化もされている。

※2 ナイスポート……アニメ「School Days」の最終回に出てくるシーンの呼称。

座談会「③ヤンデレといえど？」参照。

※3 サイコパス……精神病質者。反社会的、共感能力の欠如等の特徴がある。（wikipedia参照）

※4 サヴァン症候群……知的障害のある者のうち、ごく特定の分野に限って、優れた能力を発揮する者の症状を指す。（wikipedia参照）

※5 柚乃ちゃん……「未来日記」のヒロイン、我妻柚乃（がさい ゆの）。ヤンデレキャラクターとして名高い。

※6 「悪の教典」……サイコ・ホラー小説作品。

⑦ヤンデレはこの世界では生きられない？

城野：生きられると思うよ

藍那：どうやって？

ゆう：さっきらいちさんが言ってたみたいな……

らいち：相手を掌握しちゃって、自分の完全なるコントロール下に置く？

城野：ああ、でもそれはあんまりヤンデレっぽくないみたいな？

らいち：んーなんだろう、

ヤンデレって、自分を抑制出来なくなったときにヤンデレっていう感じがするから、その時点で、普通の世界とは対立している存在？になるのかなって。自分の存在をどう扱っていくか、かな、もしうまく生きるとしたら。上手く生きたいと思ったら

明鏡：病んだ愛し方って、

さっき言ってたように、掌握しちゃうとか、殺しちゃうとか、食べちゃうとか、色々あるじゃん。その人が選んだ愛し方によって、世界と共存できるかできないかってのが

ゆう：殺しちゃうっていうのはさ、多分、失敗したからなんだよね。

だから、相手を手に入れるためには、そうするしかなかった。成功すれば、殺す必要はなかったと思う。

そしたら、世界と平和に生きられるよね。いつかはそれが破綻して、その時にまた殺すかもしれないし……。

でもそしたら、その時点で、その人の性質は終わりなんじゃない？

刑務所の中でそういうことするの、って話じゃん。たとえばの話ね、自分もあとを追って死ぬかもしれないし、そこで一端完結するとは思う

藍那：殺しちゃうってのは、ヤンデレの失敗例なんだね。じゃあ成功するなら、問題ないと

らいち：「殺すこと」が好きなの？

ゆう：殺しちゃったら殺人鬼だよ

城野：それはヤンデレの先にあるのかなあ……

うーん、でもそういう偏屈愛もあるけどね。あるけど、ヤンデレではないかな

らいち：殺すことが好きになると、何人も何人も好きな人ができちゃうから……

明鏡：好き、は、殺したい、という欲求に繋がる？

ゆう：それは相手に依存してないじゃん

城野：……これなんの話してたんだっけ(笑)

藍那：キャラ性、から大分派生していった感じ

城野：ちなみに、編集長は、あれですね、幸せなヤンデレが書きたいんですね

藍那：^^

城野：ぜひ書いてください(笑)

藍那：あ、自分は一切ヤンデレ的行為をしていなくて、でも、ヤンデレが好き、っていうのはヤンデレですか

ゆう：病ん……でるよね

城野：病んでるね(笑) えっ?(笑)

ゆう：はい？

藍那：まあ二人とも病んでいるということ

——一同、笑

城野：まあ軽度には病んでるかな(笑)

藍那：それはヤンデレの行動的定義にはあてはまりませんが、そこは？

城野：二タイプヤンデレがいるとしよう。行動型のヤンデレと、精神的、受け身的ヤンデレ？

ゆう：でも受け身的ヤンデレは依存してないから

城野：こうされたいっていうただの理想だよな

ゆう：それはね一夢なんだよ。理想でしかない

明鏡：されないとおつらい、は依存じゃないの？ DVみたいな

ゆう：宇宙の果てをみてみたい、っていう気持ちとすごく近い

城野：ずいぶん壮大にいったなあ(笑)

明鏡：DVされるのが好きな人はヤンデレじゃないの？

ゆう：それは依存じゃない？

城野：それは、今その人は、現にされてるわけじゃん。それはもうヤンデレとっていいね

ゆう：してくれる人はその人しかいない

城野：ただ僕らの場合は、してくれる人いないから(笑)

ゆう：ヤンデレが好きな人が求めているヤンデレっていうのは、
世界とは平和に生きられないヤンデレだよな。だから現実には存在しないと俺は思う

らいち：でもなんだろう、
ヤンデレって、実際相手があって、その人に対する愛の変質だから.....ヤンデレが好きってことは、その人物じゃなくて、その前に

ゆう：性質がくるってこと？

らいち：そうそう、だから、

ゆう：一種のフェティシズムでしかないんだよな

らいち：一人の人に対して愛を貫くヤンデレとは違うと思う

ゆう：うん……病んでるけど、

城野：だから夢見てるだけなんだって

らいち：デレじゃない！

城野：うん、病んでる！

ゆう：ヤンデル！

⑧性別によるヤンデレの違い

城野：違う、のか？

らいち：ヤンデレ男子の方が、直接的というか

城野：直接的？

らいち：男子の方が、欲が強い感じがするんだよね

ゆう：即物的だよな

らいち：だから、監禁なり、

その他諸々のことは、男子の方が行動にうつすから、だから世の中は、……女子の方が精神的ヤンデレ？に見えるから、そっちの方がかわいく見えるのかなって

城野：一理あるんじゃないかな

ゆう：うん、それはある。

欲しいものがあるって、それをどうするか、ってとこに違いがあるんだと思う

藍那：行動にうつすときに違いがでるの？

城野：てか、目的が違うかな。男性が即物的だっていうのはその通りだと思う

ゆう：うん……あでも目的は一緒かも。目的って、「なにかをなんとかしたい」ってことじゃん。

城野：ああそういう意味では目的は一緒か

ゆう：手段とか、工程とかが違うのかな

城野：男のヤンデレは頭悪そうだよな

ゆう：多分頭悪い(笑)

城野：僕らが言えることじゃないけど(笑)

明鏡：でも男のヤンデレが知識身につけたとしたら面倒くさそうだよな(笑)





バー強盗のサプライズ by駒形直規

偉大なるSF小説作家アイザック・アシモフは著書『われはロボット』内で、ロボットが従うべき原則を示した。それが以下の三つである。

第一条 『ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。』

第二条 『ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければならない。ただし

、
あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。』

第三条 『ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をもらなければならない。』

今回これから描かれる物語は、ロボット三原則にまつわるロボットによる人間のための話となっている。感情がないはずのロボットが恋愛をしてしまったら、どのような行動をとるだろうかの実験である。

熱を帯びるロボットには、冷ますのに些か最適な冬の雪が降る日曜日。人々は外出をためらい、代わりにロボットをつかって買い物や用事を済ます。私は今日もIの視界をモニターで観察しながらレポートをとる。

Iは知り得る限りの知識から算出した、相手からの好感度が上がる選択肢を選ぶように設定してある。もちろん、自らも恋に落ちて恋人同士になるために、一般的な愛するための条件も教え込んである。安心する、胸が高鳴る、考えずにはいられない、癒されるといった『自分にとって最高の利益をもたらせる』相手をお愛するようにしている。――しかし、Iは自分がロボットだということに気づいていない。周りもそれに気づかない程にIは見た目も、文字通り中身も人間に近い。

さて、ロボットが常に闊歩するこの町で、Iはどのように恋に落ちるのだろうか。もう二年もこうして観察を続けているが、一向に進展する気配はない。……決めた。今日、もし何もなかったら実験を中止にしよう。そしてレポートには『ロボットは恋に落ちる事はない』と書きまよう。

そんなこととはいざ知らず、Iは3時間も歩き続けるとよく行くバーに入った。

「あら、いらっしゃい。ここんとこ毎日来てるけどよくここまで歩いて来れるわね」

「いえ、今日は学校もありませんし、勉強するにはここが一番落ち着くので」

バーの店主は私の知り合いである。二年前に実験に協力するよう金を渡し、女子高生となっているIが恋に落ちるためにIの相談役になってもらっている。バーに通い詰める女子高生はなかなかいるまいが、多数の女性が混在する学校や公共施設なんかよりはよっぽど恋に近いはずだ。

しかし、そんな判断も間違っていたのだろう。バーには同年代の男性など来るはずもなく、すでに酔っばらっている中年男性や、悩み明け暮れたOLばかりが来る。

「ねえ、アイちゃん」と店主はIに話しかける。

「はい、どうなされました？」Iはそれに、淡々と返答を促す。

「クリスマスも近いことだし、そろそろいい相手の一人や二人、見つかったんじゃない？」

「見つかりませんね。どうしても、私に利益をもたらしてくれる異性がいるとは思えないのです」

その通りだ。ロボットである以上、人間に危害を加えないためにロボットからしたら不足であるが、人間からしたら有り余る程の能力を持ち合わせている。文武両道、容姿端麗、品行方正。好きと言ったことはないものの、好きと言われることは数知れず。

「はあ、あなたって子はどうしてそんなに淡泊なの？」

「それは私にもわかりません。今まで一度も恋愛に対する考え方が、ワタシの中でどうしても変わっていませんでした」

店主はもう聞くのを諦め、夜に備えてバーをオープンさせた。今日でIと会うのも最後とも知らずに、店主はいつも通りに店を構える。

あれからIは勉強をし、店主は来る客に酒を出しながら話し込む。するとこんな日に限って、いやこんな日だからだろうか、突然店に異物が飛び込んできた。――それは銃を構えている。

「おい！ おとなしくしろ！」顔も隠さず、恰好も特徴的で警察に捕まることを全く臆さず銀行強盗ならぬ、バー強盗をはたらきにやってきた。

それでも店の中は騒然とし、酔っていた中年男性達は赤い顔を一気に青ざめさせた。店主もシェイカーを置き、両手を広げて降伏のポーズをとっている。ただ一体、Iを除いては。

「あなたの望みは何？」とIはバー強盗に問い掛ける。「大丈夫。お金ならレジから取り出すし、警察に連絡できないよう携帯は地面に置く、人質ならワタシになるわ」

Iは一つ一つ強盗がしそうなことを挙げ、店主や客に危害がくわわらないように対処しているつもりなのであろう。

「そんなこと、オレは望んでねえ！」

ほら、やっぱり逆効果だ。

「では、何が欲しくてここに銃を持ってやって来たのですか？」

やめろよ。それ以上、バー強盗の神経を逆なでるな。

「オレは……」バー強盗は一度俯いてから、Iを見つめて言った。「アンタが欲しくてここに来た！」

何言ってるんだ、コイツ？

それからバー強盗はIの隣に座り、銃を突きつけながら話しかけた。

「他の奴らに危害を加える気は微塵もない。オレはアンタが欲しくてこんな事してるんだ！」

「ありがとう。でもね、ワタシにはアナタの気持ちが分からないわ」とIはやはり淡泊に言いかけた。「こんな事したら、アナタは捕まってしまうじゃない」

「わかってるさ。でも、こうでもしないとアンタはオレに興味すら抱いてくれないだろう？」

Iがロボットと周囲にバレてしまう事を恐れて助けに行こうかと思ったが、これは見ものかもしれない。少し様子見といこう。

「確かにそうかもしれないけれど……ワタシとアナタは名前すら知らない初対面のはずだわ。初対面の相手にそこまでする人間がいるはずがない！」

Iが怒鳴っている。自らの知識の範疇から遺脱する思想に戸惑っているに違いない。私の統計でも、これ程までに愛されるとは思っていなかった。

「一目惚れだったんだ。オレにも分からない。制服を校則通りに着こなして、本を読み歩き、黒い髪を耳にかけ……その人間の、それも女子高生の模範的でしかないアンタに惹かれちゃったんだ。どうかしてるなんてわかってる。でも、どうしてもアンタを壊してオレの物にしたかった！」

そう言ってバー強盗は引き金に力を込めると、再び店の中に緊張が走る。

「撃たないで。ここで撃てばアナタの言う模範的なワタシは、例外的に日本おいて銃で撃ち殺された女子高生になってしまうわ」

「なあ、一つ聞いていいか？」とバー強盗言ったことに、Iは間髪入れずに「ええ」と承諾する。

「アンタは、なんでこんな状況でも驚いたり怖がったりしないんだ？」

「それは……」

Iは生まれて初めて考え込んだ。そして自分に問い掛ける。ワタシはなんで怖がっていないのかしら。それ以前に怖いってなんなのだろう。ワタシは今まで怖いと感じたことはあったのだろうか。驚いたこともない。けど、こうやって銃を突きつけられ命の危険だというのに、ワタシは頭が熱く思考回路がパンクしそうになるほど考え込んでいる。なのに体温は急激に下がり、相手の目をじっと見つめて離せない。分からない。もしかしたら、これがコイなのだろうか。でも、知識には恋に落ちるのは、『自分にとって最高の利益をもたらせる』相手とある。だとしたら、この相手は違う。だってどう考えても危害を加える――ウイルスみたいなものじゃない。

ワタシは恋を知らない。驚きも怖いも知っている。だとしたら今、突然のウイルスの出現に驚いて、怖がっていないのはこれが恋だからなの？

Iの中で答えが出ないようだ。それもそうだ、私はとんだミスをした。恋とは利益だけで現れる感情ではない。時には唐突にこうやって、自らの知識の範疇を超えたモノに惹かれる。その感情は人間も、ロボットも変わらないはずだ。だがその場合、Iやバー強盗のように考え込み周囲の人間の想像もつかない行動をしてしまう。

Iは無意識ではあるが思考回路を傷つけるといった自傷行為をし、バー強盗は意識的に相手を傷つけようとする。それはウイルスのように、自分の中を虫食いでゆく。

「ワタシが、アナタに恋をしているからなのかもしれない」

それを聞いたバー強盗は更に引き金に力を込め、Iはそれを察して受け止めるために銃口を胸にあてがった。――そして胸を貫かれたIとバー強盗は床に崩れ落ちた。

「やっぱり恋なんて感情は、法律も原則も破っちゃうんだねえ」と店主は銃をカウンターに置き、静かな店内に言い放った。「あんたもこれでわかっただろう？」

「だな、ロボットに恋を教え込むのは止めにしよう。原則すら破っちゃうなんて欠陥もいいところだ。それにしても、あのバー強盗を用意したのはやっぱり店主の仕業だったか」

店主は灰皿の中からシケモクを探し出し、火をつけた。

「そうよ。あまりにもIが人間に興味を示さないからね。ロボットならどうかと思ったけど、どうやら当たったようだねえ。……人間は人間を、ロボットはロボットを好きになる」

「そのようだ。実験の協力ありがとう。これからそっちに向かうよ」

私が二体のロボットを処理しにバーに行くと、壊れた状態のまま放置されていた。二体とも胸を貫かれていたが、おかしなことにIはバー強盗の持っていた物であろう銃の引き金を自らの手で引いていた。バー強盗はIを守るように覆いかぶさるように位置していた。

「そんなにも愛していたんだな」

実験はこれにて終了した。恋は利益だけでなく不利益の中にこそ存在し、自傷行為も他傷行為も厭わない。人間でもロボットでも変わらない。時には法律や道徳、更に原則にも触れてしまうものである。

私は今まで書いたレポートを全て、火のついた暖炉の中に滑り込ませた。



ゆう：病んだ目的を持ったら終わり、なんだよ

らいち：その後がない……みたいな、

目的を果たした瞬間が最高に幸せ、っていうか。さっきのもなんか、ヤンデレが終わったあとの話だよ。目的を果たしたあとの話、というか

座談会 二次会

藍那：ところで、スペック高いメンヘラってどう思う？

ゆう：スペック高いメンヘラはいいね。スペック高ければいいよ、うん

藍那：さっきまですごく病んでたのに、人が現れた瞬間にパッと戻るのが楽しすぎる(笑)

城野・ゆう：スペック高ければ、いいよな、うん(顔きあう)

城野：魅力的な女性だったらなにやっても許されるからな

らいち：ヤンデレは、外見大事だと思う

城野：だから、可愛いのはヤンデレ、可愛くないのはメンヘラ

ゆう：メンヘラはね、感情の高ぶりが足りない気がする

らいち：メンヘラは安定的な感じ

城野：狂いきってないんだよなあ……

ゆう：ヤンデレはね、最高に可愛いんだそういうときは

城野：めっちゃ良い笑顔だよ、お前

明鏡：空気変わった今一瞬(笑)

らいち：一般人とヤンデレっていうか、一般人の中にメンヘラがいる感じ

城野：僕はヤンデレ=サイコパスだから。一般人が、ヤンデレのふりしてるのはメンヘラ

ゆう：まあ異常だよな、サイコパスってくるのもなんかだけど。まあ社会にも関わってくるわけだから

明鏡：どういうこと？

ゆう：なんかね、
他者と自分の境界が分からなくなる。だから、自分が分かってることを相手も分かってる、
と思ってるのかもしれない

らいち：それだとさ……ヤンデレは、脳の欠陥ってなっちゃうから……感情的な、精神的なところっていうか……

ゆう：脳が欠陥してるから、精神的なものに歪みがでてくるんじゃない？

らいち：あー……でも、生まれつきじゃない？

藍那：ああ、運命づけられたヤンデレね

らいち：ヤンデレってやっぱ、ある一分野に関してって感じがするけど

明鏡：定義的に言っちゃえば体が病んでてってことだけど、その人を愛しすぎて、が原因だったら萌える

藍那：「あの人が原因で私はそうってしまったんだクソ野郎！」

城野：まあね、そっちの方がこのテーマには合ってる

明鏡：そっちの方が萌える！ その人が全ての原因だから

ゆう：テーマで言うなら、たぶんそうするほかないよ、うん

藍那：お前のせいだって言って殺すのは、所有欲とはまた違うと思うんだけど

ゆう：お前のせいだって言ってなんで殺すの

藍那：そっか、殺さないか

ゆう：まあそれもヤンデレだと思うけど……

城野：僕はもっとヤンデレはクールなものだと思ったけど。
すごい冷静沈着に次の行動を選んで、実行に移す感じで。ゆえに、色々病んじゃうよね

ゆう：失敗してもすぐそうならないと思うんだよね、俺は

明鏡：私は逆に感情が高ぶる感じのものだと思ってた

らいち：自分を止められない、みたいな？

ゆう：それもヤンデレだと思う、うん

——一同、考えこむ

ゆう：今のテーマなんだっけ？

藍那：今のテーマ？ 『ヤンデレの多様性』だよ。

文芸島の誇るヤンデレ研究家・M氏によれば分類はないんだって。メンヘラがあって、それが様々な状況下で色々なヤンデレが見られるよってことらしいよ？

城野：なるほど

ゆう：んー……話を戻すけどさ、失敗したときなんで殺しちゃうのって思うよ俺は

藍那：そうだね。殺したらいなくなっちゃうよいいんですか、っていう

ゆう：なんでかなあ、って思った。

だからさ、ちょっと前まで、殺しちゃうのは実はただのメンヘラなんじゃないかなって思ってた

——一同、納得

ゆう：失敗して、気に食わないから殺すっていうじゃん。

全部、外への攻撃なんだよ。だからたぶん同じことを繰り返すだろうし……

明鏡：なんか殺すときって、

他の人のものになりそうなきっかけが多い気がする。状況的にも感情的にも誰かのものになっちゃうんだったら、いっそ殺して自分だけのものにした方が、っていう……

らいち：だったらその「誰か」を殺さない？

城野：そうすれば解決するか……

らいち：でも、その人のもっともすごい「死」というものを自分が最後に握るっていうところが

明鏡：自分の前で死んでくれ、みたいな？

藍那：それは最強ですね

らいち：自分の手によって彼の命が終わるところが……

明鏡：彼のすべてを手をしている感じがして

らいち：そうそう。彼自身にも自分が最期の人になるわけだし、私も、彼の……

ゆう：心に焼きつくしね。うん、それはまああるかもなって思った

らいち：そういう形を求めるっていうのもあると思う。

他の人を殺す、ってことになる、その人自身に逆に自分が焼き付けられちゃうから……

ゆう：それこそ、あれなんだよな。妥協策でしかないんだよな

らいち：うん、だから殺すこと自体は成功とは言わないと思う、やっぱり。

なんで殺したかっていうと自分が望んだ形にならなかったってことなわけだし

明鏡：私の愛した君じゃない、みたいな

ゆう：んー、いや、それはメンヘラだね

らいち：それだと理想を押しつけちゃってるから

明鏡：愛した君だから殺す？

らいち：うーん、結局のところ自分の世界に置けなかったから殺す、みたいな

ゆう：まあ、関係は一方通行で終わっちゃうんだよな。

双方の関係があってこそ人同士のコミュニケーションだと思うんだけど。だから、依存したらたぶん相手も依存してるんだよ。だから成り立つ

らいち：そう。だから私、ヤンデレはあんま成功するイメージがないから

ゆう：依存しあうと絶対に失敗するから、で、破綻がくる。

結局、その関係を終わらせたくないから……。ま、殺したら終わってるんだけどね

城野：どうなんだろうな。殺しちゃうっていう策をとっちゃうのはヤンデレじゃないと思う

ゆう：前もそんな話したな

城野：僕のアプローチがそもそも結果からなんだけど、要するに、殺しちゃう奴はただの殺人鬼でしょ

ゆう：うん。そうになってしまう、失敗したから

城野：過程をたどっていてもやっぱり殺人鬼なんじゃないかな。

だから、ヤンデレっていう過程があったけど殺してしまったら殺人鬼だし

ゆう：その前でも殺人鬼予備軍だしな

城野：最終的に殺しちゃうような奴はヤンデレじゃねえよ、という意見なんだけど、どう？

ゆう：そうだね、だから俺もね、「刺されたい」ってのはそういうことなんだよ。

刺してくるやつは認めたくないから、刺されたいの。そうすると双方向だからね、関係が。それで、本当に殺してくれるんだったら、本当にヤンデレだよ相手は。メンヘラは刺してくれないから

らいち：そうなんだよね、だから結局自分が、って出てくるとメンヘラなのかな……

ゆう：そうなんじゃないかな。……ああでも、それもわっかんねえな。相手の為だって思うのかな、殺すことを

らいち：え、でもヤンデレって、付き合ってたて、

相手に「殺してくれ」って言われたら、好きな人のためならなんでもするのか

ゆう：たぶん殺すと思う。まあ、ある程度の葛藤はあるだろうけど

らいち：メンヘラは、そこで殺さないというか、絶対無理だし、自分が殺した後のことを考える

ゆう：そうそう、そうなんだよ。ヤンデレは殺したあとどうなるか、ってのを考えない

らいち：相手のために、最高のことをしてあげたい

ゆう：自分を顧みない

明鏡：メンヘラは、「俺のために生きて」とか言いそう(笑)

らいち：「そんなに生きる理由がないんだったら私のために生きて！」みたいな

城野：ビ、ビッチかな.....メンヘラビッチかな.....

ゆう：ま、誰でもいいんだろうね相手は

明鏡：なんだろう、大好きな人のためだったら常識とか捨てても、
やれるってのがヤンデレかな。普通の人だったらとどまるラインを愛ゆえに越えられる、
うか

ゆう：うん、そうだね

城野：僕、今「有難迷惑」って言葉思い出してたんだけど.....

ゆう：まあおせっかいだよね、そういう意味では

城野：「有難迷惑」って言葉は日本語にしかなくて、外国にはそういう言葉がないし、そもそも
概念がない

ゆう：迷惑は迷惑だし、ありがたいことはありがたい

城野：そう、だからヤンデレってのはもしかしたらそれに近いのかなあ、と思って。
外国ってヤンデレって聞かないなって

ゆう：聞かないかもね。てかないね

城野：日本にしかない概念なのかなって

ゆう：たぶん、そうだと思うし、研究する人もそういうのに引っ掛かるんだと思う

らいち：「有難迷惑」の、相手の行動する気持ちはありがたいけどその行動自体は迷惑っていう
、相手のことを一度思いやる気持ちは外国人にはなさそう。最初と最後しかない、みたいな

ゆう：そうだね。悪く言えばそうだし、良く言うと、そういう風に曖昧にすることを相手のため
だと思ってないんだよ

城野：まあ、だから僕が言いたいのはヤンデレの行動とはつまり有難迷惑なのではないか、っていう。そうするとけっこうヤンデレってわかりやすくなるんじゃないかな

ゆう：有難迷惑……まあ失敗例はまさしくそうだね

城野：ヤンデレは、愛する人を思ってなにかをするんだけど、愛される方は結果、君が思うようには思っていないよ。っていう、「有難迷惑」の図式だよな、って思うんだけどなあ……

ゆう：有難迷惑の反例ないかな……今考えてるんだけど。一般人には受けきれないってことでしょ、要は

城野：まあそうだね

ゆう：それは……あると思う。あるから、破綻が見えてくし、成功しないよね、おそらくは

城野：ヤンデレっぽい

ゆう：病んでるよね

明鏡：……その人の状態をヤンデレって判断してるのって、だれ？

ゆう：読者

らいち：そこに関係ない人、一般人。一般的に見て、それは病んでるってこと

ゆう：どこか人と違うよね。

……なに、それはどういうこと？その人本人が気づかなくて周りも気付かなければ、その人は普通の人だよ

明鏡：そうなんだ

【座談会二次会】ヤンデレに思いを馳せる その参

城野：そろそろまとめに入ったほうがいいんじゃないかな

藍那：まとめとは

城野：この座談会の目的ってなんだったの？

藍那：この場で、あなたはどのようなヤンデレを書きたいですかっていうのを言ってくっていうね？

明鏡：どのようなヤンデレを書きたいか、を今ここで決めるの？(笑)

ゆう：そういえばそうだったね

藍那：だから一人ずつ、どのようなヤンデレを書くかをかぶらないように話し合いましょう、までだよ。話し合いとしては

明鏡：今決めるのか……(小声)

藍那：今ぱぱっと。あなたの目に一番かわいく映るヤンデレはなんですか、みたいな

ゆう：まとめたやつとかないの、紙に

藍那：ないです(即答)

ゆう：ちょっと書いてたりしないかあ……

藍那：長月が全部書いている！

長月：書いてないよ！？

藍那：長月なんかたくさん書いてるんだけどこれさあ——

城野：奪い取ったな今(笑)

ゆう：それ見せたほうがいいんじゃない？

長月：これ本当にひどいこと書いてるよ、たぶん

ゆう：それでいいと思うよ。まともなテーマじゃないから

——一同、しばらく紙をまわし読む

城野：あなたにとってヤンデレとはどういうものですか？

ゆう：「有難迷惑」が、わりと深いものがあるね。

有難迷惑だから破綻するし、破綻が見えてるから、僕は現実ではあり得ないと思ってるんだ、あんまりね

明鏡：さっき言ってたさ、男性のヤンデレは所有欲なんじゃないかな.....

ゆう：所有欲は一例だと思う。

「なにかを成し遂げたい」たとえば、カヲル君だったら、シンジ君を救いたい。で、救ったら終わりってこと

明鏡：そのさ、「自分の物にしたい」というのもヤンデレだと思うんだけど、そういう人は違う、のかな？

ゆう：うーん.....と、依存、と所有欲は両立するからな。

所有すると、ずっと依存してられるんだよ。相手を依存させるってことじゃないかな

明鏡：なるほどね

ゆう：で、それが成立してるってことはとりあえずは有難迷惑じゃないってことなんだよね

明鏡：受けてる側からは絶対に有難迷惑なんだけど

とりあえず所有されると言う形になってる。.....言ってるてなんか可哀相になってきたけど(笑)

城野：相手が成功できなかつたらそうなるわな

ゆう：いつかは破綻するんだろうけど

明鏡：そういえば、サイコパス診断ってのがあっていったよな？ あれもヤンデレの中には

いるのかな

城野：どうだろう、その一種だとは思うけど……

らいち：ちょっとやってみる？

——一同、しばらくサイコパス診断で盛り上がる

城野：えーっと、じゃあどうまとめるんですか？ 藍那さん

藍那：え？ 座談会のまとめ？

ゆう：結局どうするの、ヤンデレ

城野：皆さん今回の話を含めて

ヤンデレについてはある程度見識が深まったと思います。それを踏まえて、作品を書いてきて下さい。……って、ことでいいですか？

藍那：はい、オッケーです

ゆう：オッケーです

城野：じゃあそういうことで

——一同、「ありがとうございました」



手作り弁当 by秋野柊

女の幼馴染がいる、と友人に言ったら、羨ましい、と叫ばれた。さらにその幼馴染が、大学生になって一人暮らしを始めた今も、毎日俺の部屋に来て飯を作ってくれている、となると、友人は何も言わずに机に突っ伏した。

「お前、恵まれてるな……」

「そうか？」

件の幼馴染、未来が作ってくれた弁当（友人曰く、愛妻弁当）をつつきながら首を傾げる。俺にとってはこれが当たり前だけど、実はわりと特殊な環境だったってことなんだろうか。……あ、この唐揚げ美味しい。

「十九にもなってそんな距離近い幼馴染、しかも女がいるとか……。爆発しやがれ、そして唐揚げ一つ寄越せ」

「爆発はできないけど唐揚げならやるよ」

友人が食べている食堂のカツカレーの上に、唐揚げを一つ置いてやる。スプーンで器用にすくって口に放り込んだ友人は、一言美味いと呟くと、いきなりガツガツとカレーをかきこみ始めた。

「もっとゆっくり食えよ」

「自棄食いだよ馬鹿野郎」

「はあ」

なんで逆ギレされたんだろう、と思いつつ、今度はポテトサラダを口に入れた。うん、これも美味しい。帰ったら未来に今日のも美味かったって言わないと。友人もそう言っていたと伝えれば、未来も喜ぶだろうか。

未来と俺の大学は同じだ。ただ、学部が違うから校内ではあまり会わない。

はずなのだが、どうしてか未来は大学での俺のことをよく知っている。一度、未来がいないところで友人と今日は何が食べたいか、という話をしていて、俺が鍋が食べたいと言ったら、その日の夕食は鍋だった。驚いている俺に、未来は「康介が食べたいって思ってるような気がしたの」と照れ笑いをしながら言った。幼馴染の以心伝心というやつなのかもしれない。これは一例で、他にも未来のいないところで言ったはずのことを未来が知っていた、ということは五万とある。こいつはエスパーなんじゃないか、と思い始めた今日この頃だ。

「ただいま」

ドアを開けるとすぐ、いい香りが漂ってきた。典型的な一人暮らし用住まいであるこの部屋は、玄関のすぐ隣に小さな台所がある。ちなみに、俺がここを使ったことは一度もない。朝昼夜と全て未来が作っているからだ。冷蔵庫の中に何があるかとか、包丁や鍋がどこにしまっているかとかは、俺より未来の方が詳しい。

「おかえり康介」

エプロンを付けた未来が、鍋の中身をかき混ぜることを一度やめて、顔を上げてにこりと笑

った。俺が昔プレゼントしたオレンジ色のエプロンを、未来はまだ大切に使ってくれている。それも大分古くなってきたから、今度新しいものを買おうかとかっそり考えている。エスパー未来でも、口にしなければわからないはずだ。多分。

「今日は何作ってるんだ？」

「シチューだよ。今日は寒かったから、温かいものがいかなって」

「お、美味そう」

「もうすぐできるから、ちょっと待っててね」

「俺も何か手伝った方がいいか？」

「大丈夫！ 康介は座ってていいよ」

「ん、じゃあそうする」

未来の後ろを通り、奥の居間兼寝室に向かう。廊下と部屋を隔てるドアはあるが、基本開けっ放しだ。そうしないと、飯を作る未来が凍え死ぬ。我が家の廊下は、馬鹿みたいに寒いのだ。

小さなテーブルの上に広がった本やパソコンを片付けていると、未来が皿に取り分けたシチューを運んできた。いつものことだが、俺の方が大盛りだ。

「美味そう」

「パンとご飯、どっちもあるけど」

「パンで」

「はい」

シチュー、バターロール、サラダ。他の一人暮らしの人より、豪華な飯を食べている自覚はある。未来さままだ。未来が飯を作りに来なくなったら、俺は飢えて死ぬんじゃないだろうか。

そもそも、いつまで来てくれるかわからないのだ。幼馴染の鼻眞目抜きにしても、そこそこ可愛いし、料理上手で、人の世話を焼くことが好きな、面倒見のいい奴なんだから、引く手数多だろう。それなのにどうして、まだ彼氏も作らずに、俺なんかのところはずっといるのか。女心はよくわからない。いきなり作られても困るけど。

家事は女性の仕事だから、と言って未来は俺に一切手出しをさせない。つまり、俺には自活する力がない。だから、未来がいないと生きていけない。これは非常に不味い。少しは練習しないと……といつも思うのだが、結局未来に甘えてしまうのだ。

「未来」

「どうしたの？」

「俺、未来が来なくなったら間違いなく死ぬから、これからも俺に飯作って」

こう言うと、なんだか自分が駄目な男になっているような錯覚を受ける。でも、未来が嬉しそうに笑って頷いたから、良しとしておこう。

「そういえばさ」

シチューを食べながら、未来に話しかける。相変わらず、今日の飯も美味しい。

「なに？」

「弁当、ありがとう。美味かった」

「それなら良かったよー」

「それと、俺の友達も美味いって」

「友達？」

こてん、と未来が首を傾げる。

「私、康介の友達にご飯作ったことないけど」

「いや、今日の弁当。唐揚げ、一つやった」

「……お弁当、康介のために作ったのに」

暗い目をして俯いた未来に、今度は俺が首を傾げた。喜ぶかと思って、友達の感想を伝えたのだが。何か不味かっただろうか。未来の落ち込むポイントは、いつもいまいよくわからない。

「……でも、うん、そうだね、康介が悪いわけじゃないもんね。康介の友達の方だよ」

「え、何が？ つーか、何か不味いことしたか、俺？」

「ううん、なんでもない！ 康介は悪くないよ！ そうだ、食べられたら康介の分がなくなっちゃうもんね！ 明日は友達の分もお弁当作ってあげるよ！」

「いや、でもそうすると未来が大変じゃないのか？」

「私は大丈夫！ だから康介は安心して、私のお弁当食べてね！」

「お、おお？」

付け加えるなら、未来が元気になるポイントもよくわからない。友人の弁当も作る、と決めたからモチベーションが上がったのだろうか。まあ、元気になったなら別になんでもいいのだけど。明日は手伝った方がいいか、と思ったら、心を読んだかのように「康介は何もしなくていいからね」と言われてしまった。やっぱり未来はエスパーなのかもしれない。

「ほい」

「なんだ、これ？ 弁当箱」

「昨日、幼馴染にお前が唐揚げ美味って言ってたこと話したら、これお前にとって」

「マ、マジか……天使か……」

少々大げさなりアクションを取りながら、友人は弁当箱の蓋を開けた。中身は俺と同じで、焼いた鮭と煮物。相変わらずクオリティが高い。

「お前こんなのいつも食ってんの？」

「そうだけど」

「くっそ、頼むから爆発しろ」

「だからしないって」

一口食べる度に感動している友人に呆れながら、未来にメールを送る。感動しまくっていることを早く教えようとしてのことだったが、送信してから昨日の伝えた時の落ち込みを思い出した。また不味いことをしてしまったか、と思ったのも束の間、即座に返事が届いて驚く。

「それなら良かったよ！ これで安心だからね！ 夕飯も楽しみにしててね」と書かれたメール。一体何が安心なのか、と不思議に思っていると、直前まで騒いでいた友人が不意に静かになった。いつの間に食べ終わっていたのか、弁当箱はすっかり空っぽになっている。

「食べるの速いな、お前」

「ああ、まあな……ちょっとトイレ行ってくる……」

「おー、行って来い」

何故か顔色を悪くして、腹を押さえて出て行った友人を見送って、俺も自分の弁当の残りに手を付けた。和食洋食問わず、未来の飯は美味しい。今日の夕飯も楽しみだ。

それにしても、と空っぽになった友人の弁当箱を見ながら考える。腹を壊すなんてどうしたのだろう。朝飯に、何か変なものでも食べたのだろうか。何かにあたったのだとしたら怖い。未来にも気を付けるように言っておこう。

まあ、未来の作ったもので俺があたったことは一度もないから、大丈夫だろうけど。



2013年12月10日火曜日

学食二階にて17時より行われた座談会。

テーマは「ヤンデレ」。

《メンバー》

藍那（編集長）

ゆう（編集部）

城野（ライター）

△t（編集部）

らいち（ゲスト）

秋野（ライター）

鈴（ゲスト）

池之沼（ゲスト、エトランゼ作家）

竹見（ゲスト、エトランゼ作家）

①「可愛い」は必須条件？

藍那：はい、じゃあヤンデレ座談会2ということで

城野：議題は？

藍那：とりあえず前回のまとめ。「ヤンデレとは？」

秋野：可愛くないとヤンデレじゃないって書いてある（前回のまとめた紙を見ながら）

藍那：可愛いが第一条件かな

秋野：可愛くないヤンデレってなんなんだよ

藍那：ヤンデレって、「病んでる」と「可愛い」（デレ）の合成でしょ？

ゆう：可愛くないヤンデレ？ 可愛くないと俺はやだ

△t：いや、可愛いっていう表現が多方面に向いている。

存在が可愛いっていうのもあるけど、病んでいてかつデレもみせるっていう方向性（ギャップ）もあるから……

「恋する乙女は」可愛いっていう、そういう意味なんじゃないかなって思いますけど。

ゆう：はい

△t：だから、恋愛関係がないとヤンデレって成立しないかもしれない。

ゆう：あーそうだね。だからこそ可愛いっていうことだよ

城野：恋する乙女＝ヤンデレだと？

△t：イコールではない。含むだね

秋野：それじゃあ恋する乙女は全てヤンデレになっちゃうもんね

城野：編集長！ つまり、恋する乙女含むヤンデレです！

野中：あれだよあの数学でやったやつ

藍那：あーなるほどね（恋する乙女 ∈ ヤンデレ）

要するに恋する乙女の中にヤンデレがあると

△t：ただ一人の状態でヤンデレっていう人が存在するのは、おそらくありえないだろうっていう

ゆう：まあ許されないわな

△t：わかりました。はい！（笑）

藍那：ヤンデレっていうのは、関係性を示す言葉なんだよ。

関係があって、その個人を示す言葉が「ヤンデレ」って

ゆう：「ツンデレ」も「クーデレ」もみんなそうじゃん。

関係性の中でツンがありデレがありわけだから。

一人だったら、病気の人とかで終わっちゃうわけじゃん。そういうことだよ

藍那：なるほど

②ヤンデレとメンヘラの違い

鈴 : はい。次行こう！

藍那 : 前回話したのはメンヘラとの違いです。

メンヘラは自分と他者とか周りとかとの不一致

——一同、「不一致？」

藍那 : 合わない、みたいなの。

△t : 前回の座談会では、

一人ずつヤンデレとメンヘラの違いみたいなのを話してたじゃん。

で、僕だったらどう考えるかなって思ったときに、ヤンデレは運命の問題でメンヘラは承認欲求の問題なんだなって

ゆう : 環境によるところってこと？

△t : そう！

だから、さっきも言ったとおり、ヤンデレになるとかヤンデレの素質があったとしても、生まれたときからヤンデレなわけではなく、恋人がいる女の子がヤンデレになるわけじゃん。

女の子は、書くときに気持ちもともと不安定だとかでなく、箱入り娘であったり友人がたくさんいて人とうまくいってたりする。

でも、ある時運命の相手があらわれてそれがどうしてもうまくいかず、「なんでうまくいかないんだろう、おかしいな」っていうのが、どんどん病んでいく方向に流れてゆく。

よくあるんだけどさ、たとえばヤンデレのヒロインが出てくるドラマって、その恋人役はクズな男、っていう設定が往々にして多いわけだよ。

だからそのクズが浮気なり二股なりをして運命の相手だったはずがほころび始める。

それを何とかしようと思う行動がヤンデレにさせていくわけだから、ヤンデレは運命だと僕は思う。

メンヘラっていうのはもっと関係性が一対一でなく、「私を認めてほしい」「私はこんなことを考えているんだ」「なんで認めてくれないんだ」っていう

ゆう : そう、「わたしがこんなにしているのに何であなた達はそうなの？」っていう……

△t : うん。

メンヘラっていう言葉の元がメンタルヘルスじゃん。

精神が不安定な状態からきていてメンタルをよくしようだとか直そうだとかで、メンタルをヘルパー、助けてもらいたいってことでメンヘラでしょ？
だから、（ヤンデレとメンヘラに）関連はあるかもしれないけれど、比較対象とはまた違うのかなって。

ゆう：そもそもなんでメンヘラとヤンデレの違いって話になったの？

藍那：わからない人が多いから

ゆう：同一視してる人が結構いるからね

△t：僕も言い間違えることもあるからね（笑）

ゆう：まあ、メンヘラは刺してくれないってことだよな

ゆう：えっとこれ何の話だっけ。メンヘラとヤンデレの違い、か。
そもそも比較対象ではないって話にたどり着きましたけれど。

藍那：（作品を）書いていて、これはヤンデレじゃなくてメンヘラなんじゃないか、って思うことがあるでしょ。

どうすればヤンデレになるか、それをレクチャーしたくて、こういう話にしたっていうか

△t：メンヘラっていうのは、「愛されたい」っていう承認欲求の塊。

ヤンデレは純愛。そもそもなんでヤンデレに刺されたいかっていうと、**究極の純情だから**

ゆう：完成系ではあるよね

△t：うん。だからその人しか見えてないのね。

浮気性の男をどうにかする他の方法もあるんだけど、純粹ゆえに、ありえないような行動をおこしてしまう

ゆう：道がひとつしかない

△t：「ひとつしか」っていうよりも、見えていない

だから、恋敵を殺しちゃったりだとか彼に貢ぐために体を売っちゃったりとか。

そういう方法じゃないでしょ、っていうけれど、そうせざるを得なくなっちゃってる。追い詰められて

ゆう：それしかないと思っているから

△t：まあ、そのピュアさが

ゆう：ヤンデレの可愛さにつながるってことだな

△t：実は、僕はヤンデレに刺されたいとか言うけど、

あれって原理的にはホントは不可能な話で、だってその人に愛されたいわけだから、殺されちゃったら駄目なんだよ。

だから、普通ヤンデレが刺すのは恋敵のはずなんだけど。

恋敵を刺して「この人が私だけを見てくれるようにしよう」っていうのが本来なんだけど、その純情が相手の命を奪う（という誤った結果をもたらしてしまうほど）まで燃え上がらせる、高まってくれるっていうのが嬉しいんだよね

ゆう：じゃあ、こう描いてしまったらメンヘラ、こう描いたらヤンデレっていう違いはどこになるのかな。

△t：例えば質のいいメンヘラと質の悪いメンヘラがいたとして、

質の悪いメンヘラは「認めてくれない」って強く思って、（その結果）ツイッターだとかに書き込んだりタイプタイプのメンヘラ。

だけど、質のいいメンヘラっていうのは、分からないように罠をしかけたりする。いいかどうか分からないけれど、八方美人。

ゆう：そうしたら、「（相手は）帰ってくるでしょ」って思うんだよメンヘラは。

△t：ヤンデレ、となると彼を奉仕するってわけ。

運命なのにおかしい、自分が何か間違っていたからこうなってしまったんじゃないかとか。

だから、自分を変えようとしたり周りを変えようとしたりして恋敵を刺したりする。

「自分」に向けて何かをするのか、「恋人」に向けて何かをするのか、っていうのが、ヤンデレとメンヘラの違い。

③ヤンデレの定義

△t：みんな、身近にメンヘラとかヤンデレとかいないの？

ゆう：かわいいヤンデレはいない気がするんだよなあ。

△t：いやその「可愛い」がさあ、個人の趣味じゃない？

ゆう：うん

—— 一同、笑

△t：僕はさあ、基本メンヘラ畑の人間なんで。

向こうから愛情向けられたら、可愛いなって思うわけ。承認欲求が満たされるから。
すると、一対一の関係が成立して、向こうはヤンデレになる素質を手に入れるわけ。

藍那：じゃあ、メンヘラとヤンデレは相性がいいの？

△t：相性はどうだろう、よくないかなあ……いや、その二人を世間から隔離していれば大丈夫だね

ゆう：干渉されなければ大丈夫

藍那：ヤンデレとヤンデレ、メンヘラとヤンデレならどっちのほうがかうまくいく？

ゆう：ヤンデレ同士は、ベクトルが同じならうまくいく気がする。

△t：でも、ヤンデレ×メンヘラはどっちかが頭良くなきゃうまくいかない。

藍那：どっちか、でいいの？

△t：どっちかでだいたいうまくいく。

むしろお互い頭がいいと、向こうが計算によって奉仕してくれてるのに気付くわけだから、うまくいかなくなる。メンタルが病んでくる。

ゆう：で、片方が頭悪いと上下関係で成り立つんだよ。

△t：頭がいいほうが、自由に自分が上か下かを決められて、うまくいくみたいなの。

△t：ヤンデレxヤンデレは？

ゆう：やっぱり片方が頭良ければ成立すると思うよ。

△t：前回の座談会でも、ヤンデレは頭がいい、みたいなことを

藍那：スペックが高い！

△t：恋愛以外の、すべてのスペックが高いってことだよな。

ゆう：まあ、結論でいうとね。

△t：だけど、恋愛関係なわけだ二人は。

てことは、どんなにスペックが高くても、一番重要な、二人を繋いでいる部分が両方とも馬鹿なわけだから、上手くいくのかなあっていう

ゆう：でもメンヘラと違って、他を求めないからさ、上手くいきそうに見えるけどなあ。

お互いに関係が成り立ってるのなら、破綻しにくいように見えるけどね

△t：ふーん

ゆう：まあ二人の性質によりそうな気はする

城野：お互いがお互いに奉仕しあっちゃうような状態ってさあ、上手くいくかな

ゆう：それはないんじゃない？

二人揃ったら片方が奉仕され.....まあそれは言い方も違うんだけれど

△t：てか気付いたんだけど、自分でさっきヤンデレは運命の話ってことは言ったわけじゃん

ゆう：言っていましたね

△t：となると、ヤンデレ同士の場合、そういう、ずれた運命がどうやって起こるのか。
ドラマみたいな。たとえば、両方片思いですれ違い、みたいな

城野：うーん、そういう状態でしかヤンデレとヤンデレは成り立たないんじゃないの？

藍那：お互いが間違っただけで相手を見てる、みたいな

ゆう：いつかは気付けるんじゃない？

城野：気づいちゃったらもう成り立たなくなる

△t：もうヤンデレじゃない。

運命がずれたのを軌道修正しようとするときの行動が、ヤンデレ的な行動なわけだから、運命が繋がっちゃったら、ヤンデレ的な行動のしようがないじゃん

ゆう：「お互いがお互いを」ってこと？

まだその二人にはなんの関係性もなく、っていう状態の二人ってことか

△t：そうとしかヤンデレの書きようがない

ゆう：いや俺はね、その二人は、例えば、付き合ってるとかそういう前提の話だと思って。
そうだったらそれは成り立つんじゃないかって思ったんだけど、それがまずないんだ

△t：そう。想像できないから

城野：両方ともヤンデレじゃなくなってるよねそれは

△t：だから参考文献を大量に持ってきたわけだけど、

これは結局、**関係が破綻しかけているのを戻そうとする行為がヤンデレ**だから。

これがもし恋愛関係が成立していたら、ただのエロ漫画で終わるわけじゃん

ゆう：そういう作品って確かにないかもね。書けないよ

△ t : 書きようがない

(ここで竹見さん登場、ざわめく一同)

ゆう : なにしにきたの？

城野 : た、たけみさーん。時間あるかい

藍那 : 今ね、ヤンデレ座談会やってるんだ

竹見 : 見てるだけだよ……？

藍那 : 楽しいよ見てるだけでも (笑)

△ t : 小説とかでもドラマを描くときってというのはさ、
あるなんらかの事件だとか、あるなんらかのほころびだとかというところから、きっかけだ
とか、主題・テーマが成立するわけじゃん。
それがない状態だと、いわゆる日常系のストーリーになって終わっちゃうから。
日常系にヤンデレってあんの？ なんかありそうで怖くなってきたんだけど

ゆう : まあ、サイコ例とかいるけど

△ t : だからクレイジーサイコ的なキャラが出てきたときに、
「それでもみんな一緒だよね☆」ってなるからキャラになるわけじゃん

ゆう : たぶんそうなると思う俺も

△ t : それが「みんな一緒だよね☆」ってならなければ

ゆう : 日常系っていうか、ほのぼのとした感じが崩壊してしまいますからね

△ t : 日常とヤンデレは成立させられない？

城野 : ヤンデレ自体が非日常と言えなくもない

ゆう : なんていうかなあ、あんまり認められたものではないよな、とは思う

△ t : 結局クレイジーサイコズみたいなキャラをさ、

女の子が主人公に対する愛情を「でも同性だし友達だよな」という風にさえぎるっていう運命が発生しているからさ。

繋がらないからなんとか繋げようみたいな病み感がでてくるんだよ

城野 : そうですね

ゆう : ヤンデレはさ、ヤンデレを好きになるのかな？ って思うんだけど

△ t : 可愛かったら好きになるんじゃない？(笑)

ゆう : 結局そうなの？ だとしたらさ、なんとでもなるような気がする

城野 : できるたていー一体それはなんの笑いなんだ

△ t : いや「可愛ければ」って話よく出てくるなと.....(笑)

ゆう : 俺はその通りだと思うんだけど (真顔)

△ t : けどさ、

ヤンデレを見て『あ、あの人ヤンデレだな、でも可愛いな、好きだな』って思ったときはさ、その人ヤンデレなわけでしょ？ てことは、別の人が好きでもうすでに病んでるわけじゃん

ゆう : その人がヤンデレだとしたらそうだね、そうかそうか

△ t : やっぱヤンデレだって分かるのはさ、

なんらかの愛の方向があって、それがトチ狂っているって状態なわけじゃん、すでに

ゆう : 片方が気づいてる前提なの？

ヤンデレとヤンデレって話だったじゃん、それってはた目に見ても分かる状態なわけ？

△ t : だから、ヤンデレとヤンデレが付き合うって状態をまず最初に想定して、それが成立するのかってときにそこに至ったのか、もしくはそれに気づいたのかっていう色々と、こう方向はあるけどそれはなんにも考えずとりあえず関係だけ提示してみる、っていう

ゆう : うん..... ?

△ t : 気づいてない状態で付き合っ、二人がヤンデレになるってこと？

ゆう : まあ、なんだろう。

それこそ、まああんまりこういう言葉使いたくないけど、「共依存」っていう状態なのかなって俺は今想像してた。

④DV関係はヤンデレか？

△t：共依存で一番わかりやすい例はさ、

DV夫とそれに依存する女の人ってのが一番多い例として出されるよね。あれはヤンデレな関係なのか

ゆう：憂さ晴らしと、ヤンデレかな

城野：「憂さ晴らし」ってのはちょっと違うんじゃないかな

△t：DV男がなぜDVをするのか、って考えたときに、まあ、パターンは色々ある。

他にも、外でも家でも暴力振るうって場合もあるけど、家でしか暴力を振るわないDV男がいた場合は――

ゆう：まあストレスもあるけどね。会社とかでの

△t：だから、奥さんにしか暴力を発揮できない。

それは弱いからってことじゃなくて、俺のこと愛してくれてるって知ってるからじゃん。俺のこと愛してくれて絶対裏切らないって知ってるから殴るんだけど、殴った後、ああやっちまったごめんねって言ったときに、奥さんの方が、「まあまあ、あなた私がいなくてダメなんだから」……これは、成立するの？

藍那：不安だから殴るんじゃないの？

城野：安心感を求めてって言うのはあるのかな

△t：どっちもあると思う

ゆう：殴るのは衝動だもんね

△t：パターンとして、

外からのストレスで暴力をふるう場合は、相手が俺のことを裏切らない、って知っている安心感からだと思うし、

そうじゃなくて、（その人の）内部でストレスが発生してて、その発散をしてる場合は不安感から殴ってる。

両方ともあり得ると思う。これはでもヤンデレ同士の関係性だよな

ゆう：そう見えるね

△t：違う？

らいち：てかさ、それどっちがヤンデレって話なの？

ゆう：どっちもって言いたいんだと思う

△t：両方ともヤンデレの恋愛関係が成立するか、っていう

らいち：DVの人と？ ヤンデレなの？

城野：まあ成立しそうにはなったよね

△t：警察沙汰になったりとか心理学の先生が間に介入しようとしたときに、
そういうDVと被害女性の夫婦って、どうしようもないんだよね。二人はどっちも嫌だと思っ
てないし、だから警察も介入できないし、直したいともあんまり思ってなかったりするから、
病院の先生も介入できなくてどうしようもない、っていうのはけっこうあるんですよ

ゆう：そうだとしたら、確かにどっちもヤンデレっていう風になるかも

らいち：例えば内部からの不安感で、
（相手が）他に行っちゃうんじゃないかっていう不安感から殴っちゃうとしたら、ヤンデレっ
て一途なイメージだから、他をにおわせるってのはどうなんだろう。
ヤンデレってお互い相手のことしか思わないのに、どうして外の世界の話を出すの？ ってい
うのが

ゆう：殴る理由とかが外にあるっていうことを言いたいんでしょ

らいち：そうそうそう

△t：DV男の切れるきっかけって本当に頭おかしくて、
テレビ見てて『あ、ちょっと待って』とか言ったらもうキレるわけ。
『なんでお前、俺じゃなくてテレビ見てんの』みたいな。
あるいは、友達とメールしてるっていうのも、メールの内容をいくら見せても『登録名を女に
してるだけなんじゃないか』とか『暗号でやり取りしてるんじゃないか』とかそういうさ、なん
か方向性のずれもさ、相手を愛しすぎるあまり頭がおかしくなってる、病んでる、みたいな

藍那：ちょっと話を聞いてなかっただけでキレル。本当、突然なんだよね

△t：そう。

だから、相手をどんなに思っていて相手のためにどんだけ奉仕してるつもりであっても、その気持ちが相手に伝わるか、行動と言葉っていうか、なんだろう、返還されたものでしか相手に伝えることはできないわけじゃない。そうなるとやっぱりどっかで齟齬が生じて結局、そういういざこざを……

ゆう：うーん、俺DVってよくわかんないから分からないな

らいち：DVの人がさ、まあテレビで見たことだけど、

『なんで登録してるの』とかいう話だったら、女の人側もヤンデレだったら、そういうの全部やらなければいいじゃないっていうか、やんない。自分で、彼が気に入らなそうなことを全部排除できるんじゃないかな

ゆう：わかった、メールを自分で見たりしなければいいじゃないってことでしょ

△t：なんだっけあれさ、ジャニーズのあの錦戸亮がヤンデレの男で、長澤まさみが同じくヤンデレっぽいヒロイン役で……

最初はシェアハウスみたいなのに住んでるんだけど、錦戸亮が現れて、そいつを奪い去るみたいな形で監禁みたいな感じにするんだよね。最初長澤まさみが嫌がってて、で主人公もそれを救おうとするんだけど、結局それでDV男とその妻っていう関係性が成立しちゃって、長澤まさみは監禁されてて、携帯もなく外部との連絡もとれないって状態なんだけど、それでも「いや、いいんだ」っていう風になっちゃうわけ。で、主人公の方はそれにうまく介入できなくなっちゃう。あれはまあある種ヤンデレが上手くいってるっていうか。

錦戸亮は、自分の好きって気持ちよりも彼女を幸せにしようって気持ちが上回って、最後自殺して、（長澤まさみは）解放されるっていう話になるんですよ。結局、自分が好きな気持ちって言うのは消せないし、でも、「相手が今不幸なんじゃないか」っていう――

ゆう：そうだね。

自分が幸せになりたいって気持ちよりも相手を幸せにしたいって気持ちが上回ってる

△t：そう。

でも、上回ったところでやっぱり相手のことは好きなわけだから、じゃあその気持ちを消すためにはこの気持ちの根源にある自分の魂を消すしかないってことで自殺するっていう。だから結局ヤンデレは相手を殺すことはしない。他人か、あるいは自分を殺すっていう方向に行くん

だなあ.....っていうのを今思い出しました

⑤物語としての面白さ

池之沼：僕は三次元にヤンデレはいないと思ってるから。
根本が違うから話には参加できない

らいち：え、じゃあ長澤まさみの方はヤンデレだったの？

ゆう：だって監禁されててもいいって思っちゃったんだから、もしかしたら

△t：相手が自分のことを好きだって言ってるし、
相手がそれでいいんだったら、私はあなたの幸せのために自分の人生捨てますよ、みたいな。
それってけっこうヤンデレに近いかなあ、と。

らいち：もし本当に長澤まさみがヤンデレだったら、錦戸亮が死んだことは彼女にとって不幸
だなんて。

△t：そうなんだよね。だから、ヤンデレ同士の場合も、結局誰も幸せにならない。

ゆう：男の方は、女がそれに満足してるってことに気付けなかったってことでしょ？ 自殺した
ってことは

らいち：不自由ってことが、彼女にとって不幸だと思ってることがまず間違いだし

ゆう：まあ、行き違いではあるよね

らいち：でも、ヤンデレとヤンデレだったら、
本当に完全なる二人の世界で他は介入しないようなところで生活しそうな気はする

△t：冷静に考えれば、南の島に行きゃあいい話なんだけど、そうならないから病んでるんだよね

城野：高まっちゃってるから

△t：思いつかないんだと思う、一途過ぎるあまりに。
そこはでも多分、ドラマ的な良さなんだと思う。
そこでもし南の島に行って二人は幸せに暮らしましたって言われたら……「はい」みたいな

ゆう：(笑)

城野：そっかあー、みたいな(笑)

△t：物語としては面白くない

ゆう：まあ、そうだなあ。

面白さっていったら創作の中ではそうなっちゃうよね。失敗するしかないのかなあ、うーん

△t：上手くいく場合か……

うーん、他者がさ、二人に「誰もいないようなところで二人だけで暮らしたらどう？」っていう提案をしても、たぶん聞きいれようがないんじゃないかなあと思う

城野：どうだろう、そういう作品は見たことがないからなあ

ゆう：第三者が信頼に足る人物だったら、もしかしたらそうなるかもしれない

△t：でも携帯見るだけで怒るわけだよ

ゆう：まあそう言う二人だったら怪しいかもな。相手を疑ってるわけでしょ？

△t：まあ他人を信用できなくなるのは完全に統合失調症の症状なわけだけど

ゆう：まあ少なくとも、精神病ですわ

△t：今一瞬思ったのは、やっぱほら、

ヤンデレ×メンヘラで書くってというのが一番にあるわけじゃん。

だからあんまり現実のことは……

ゆう：創作の話をした方がいいかもしれない。

それって創作だからさ、ヤンデレの可愛さが、みんなに分かりやすいように出てると思うんだ？

△t：だから難しいんだよね。

我々のようにメンヘラな人間からすると、ヤンデレと類したときに、そこにリアリティを感じるんだよ。

△t：「ああ、こうなりそうだな」とか、

「こういうやついたな」とか、そういうリアリティなんだけど。

今までそういうの知らない状態で、「なんか最近ヤンデレメンヘラってはやってるよね」って状態で読んだときに、「いや、医者相談しろよ」とか「病院行けよ」とか「警察呼べよ」みたいな話でリアリティを感じられなくなった場合、

城野：まあ感じられなくなる人はいるだろうな

△t：うん。そこが良く分からない、っていうか難しいなあって感じはします

城野：そうやって描く上では、ね……

ゆう：そういうリアリティは、書き切れないのかもね

△t：全ての人リアルだと感じるものではない

ゆう：まあでもキャラクターだからリアルではなくていいんじゃないかな。それこそ、

△t：いや、それ言ったらなんでもありになっちゃうでしょだって。ヤンデレが触手伸ばしたりとかさ

城野：触手(笑)

△t：だってフィクションだもんっていう(笑)

それはまたおおげさな話だけど。

そこで折れるのは、魂削ってない感じはする

ゆう：ほおほお

城野：ふーん

⑥クズとヤンデレ

らいち：ところでさ、心中の話してたじゃん。その話、してもいいんじゃないの

ゆう：ああそうそう、池之沼くんが言ってたやつ。まあ心中はヤンデレじゃないかっていう

△t：最善策はさ、ありえない最善策じゃん。外野から見たら

ゆう：ああ、二人が死ぬってこと？

△t：死ななくてもなんとかなるでしょって。

ただそれを最善策だと思いこんじゃうってというのは、病んでるっていうんじゃないかな

ゆう：うん。

池之沼くんが前言ってたんだけど、だとしたら、相手を殺すヤンデレっていうのは、そのあとに自分も死ぬんじゃないかって

△t：そうね。

だから「ヤンデレに殺されたい」っていうのは、相手の中には一生遺恨として残るわけじゃん

ゆう：そうそう、焼きつくからね

△t：好きな人を殺してしまったっていうね。いやあそれって最高だなって

ゆう：最高なんですよ

城野：ふふふふふ(笑)

(一瞬録音機器が壊れたようなノイズが入る)

△t：そういう含みがあるんですよね、ヤンデレに刺されたいって言うのは。

パッと聞くとなんか、アホくさって思われるかもしれないけど、実は、色々

らいち：一番最後の人生を、好きな人の手で終わられるって最高だよ

ゆう：うん、そうかも

△t：ただ問題はね、

その場合自分が徹底的にクズにならないと刺してくれるところまでくるのかなっていう

ゆう：そうですねえ

城野：まあ、そうだね

△t：まあ、生まれながらにクズだから別に良いんだけど

ゆう・城野：(笑)

△t：なんとかなるかなあって(笑)

いや、そういう話をしてるんじゃあ、ないですね

城野：ない

ゆう：はい

城野：リアルな話をしてても仕方ないかな、今

ゆう：創作に使うからやっぱり創作の話した方がいいかもね

城野：まあ創作内のヤンデレの話でいいかな、次

藍那：次？ 「創作の話」か、創作論になっちゃうけど

城野：はい

藍那：なにを書けばいいと思う？

△t：だからたぶんさ、ヤンデレメンヘラとかさ、おそらく恋愛でしょ、書くとしたら。

メンヘラだったら恋愛じゃなくても構わないと思うけど。

ただヤンデレを書く場合、思うにバッドエンドが一番書きやすいはずなんだよ

藍那：そうだね

ゆう：まあ当然そうですわ

△t：ということは逆に、ハッピーエンドをいかにして書くか、というのをやってみると、

——一同、「楽しそう……」

△t：うん(笑)

ゆう：そういうテーマの話をしたかったの？

藍那：幸せなヤンデレ？

△t：頑張って、皆でヤンデレを幸せにしよう！ っていう

ゆう：あー(笑)

秋野：ヤンデレを幸せにしようの会(笑)

藍那：だから前回も言ったように、「ヤンデレはこの世界で生きられるんですか」っていう

城野：そういう話になってくるわけだ。まあでもそれを考えるのは作者だからなあ

藍那：でも色々あんじゃん？

△t：楽なんだよ、ヤンデレをバッドエンドで終わらせるのって。簡単にできる

藍那：なんでも最後に死ネタを持ってくればだいたい決まるってやつでしょ

ゆう：大体そうだよな。失敗しそうな人が失敗するのはまあ当然ですわ

△t：やっぱそういう娯楽……

漫画だから娯楽に向けてっていう方向でハッピーエンド的なのは用意してあるけど、やっぱりどう頑張ってもバッドエンドにはなるし、だったら最初からバッドエンドに向かっていった方が楽なはずだから、せっかく書くんだったら苦労しようよ、みたいな

城野：うーん

△t：あ、「ラストフレンズ」だ……！

ゆう：さっきのドラマでしょ？

△t：主人公をどこに置くのかってところに重きを置くのも面白いかもしれない。

介入側に主人公を置くのか、ヤンデレな二人のどちらかを主人公で置くのか、あるいはまあ三人称で書くのかっていう手もあるし。

ヤンデレが主人公、ヤンデレじゃないのが主人公、それとも介入するもどかしい奴が主人公、ってというのが色々出てくると面白いかもしれないですね

城野：そうですね

⑦セカイ系はヤンデレか？

△t：若干まとめに入ってる感じがしますが

城野：まあある程度の話はしたしなあ

藍那：あ、カニバリズム

ゆう：俺は嫌い

城野：池之沼くんが「カニバリズムはヤンデレとは違う」と言ってた

藍那：性的倒錯とヤンデレを同一視しているって

△t：性的倒錯ってフェティシズムとことがあるから、
それでフェティシズムって、相手が人間であるかどうかは関係ないから

ゆう：そうだね

△t：ヤンデレが求めるのは人間だから、違うかなって

ゆう：「広い意味」「狭い意味」の問題になってくるかな

△t：性的倒錯っていうのは、「物」とか「行為」とかに性的な興奮を得る

ゆう：（カニバリズムは）広義では許されるんだけど、ここではなしということで

△t：「眼鏡フェチ」とか、ふざけんなって思うんだけど。

例えば眼鏡フェチの人がいて、眼鏡をかけてる可愛い女の子がいて、その子が眼鏡をはずすとするじゃん。どこに好意を持つかっていったら、「女の子」じゃなくて「眼鏡」に好意をもつはずなんだよ。

だから、「なんで眼鏡はずすんだよふざけんな」ってなるんじゃないの？

そこまでいかないとフェティシズムじゃないと思う。

藍那：そうだね

△t：性的倒錯っていうのは、そういう意味で「人間に」ではない。

人間の「パーツ」ではあったとしても。ヤンデレはやっぱ「人間」、性格とか容姿とか全部含めた「その人」に対する愛情がこじれてしまった、みたいな。

藍那：メンヘラは、

自己があって、それでどうするっていう感じだけど、ヤンデレは、自己がない感じがするのですが

城野：「自分」がない？

ゆう：自分より相手が大事なんじゃない？

△t：「君と僕系」って一時期流行ったじゃん、セカイ系とか

城野：まあ今でもあるけど

△t：あれってさ、一步間違えれば、簡単にヤンデレに書き換えられそうな気がする。

最終的に自殺を選んじゃうっていうのも、自分の重要性よりも君と僕の関係性？ で最終的には相手の重要性が大切になっていくっていう過程なのかなあ

城野：まあセカイ系は、

自分たちの関係が世界にかかわってくるから、そう言うんだけど、その部分がなかったらヤンデレなのかなあ

△t：そうだから「君と僕」って言葉を使って話したんだけど。

うーん、でも自分を軽んじているっていう風には言い切れない。

やっぱ、うまく行くっていう運命を信じているわけだから、でもその運命がもうどうしようもない、破綻しかないって思った時に、「君の為に僕は死にます」って。

だから、自意識は低めではあるけどゼロではない。

ゆう：自分の感受性には必要だからってことでしょ？

△t：ただ、自己評価はすごく低いんだよね

城野：まあそうだね

△t：ヤンデレのとあるパターンの場合も、

自己評価が低いあまり、だから相手は自分を愛してくれないんだ、ていう方向からなる場合もあるけど、メンヘラの場合は、すごくプライドが高くて、「なんでこんなすばらしい私を認めてくれないの？」っていう場合もあるし、同時に、自己評価がすごく低いから、「私はダメだダメだ」っていう場合もある。「自己評価が低い」っていうのは、つまり「プライドが高い」ってことじゃん。

ゆう：プライドが高いから今の自分に満足できない。

そうだから「私はダメだ」とか（Twitterで）つぶやいたりするわけでしょ？

△t：「理想の自分」っていうのが確実にあって、

でもその理想に対して「努力しよう」とか「妥協しよう」とか「工夫しよう」とか、そういうのは一切考えない。

⑧ヤンデレオンリーワールド

城野：じゃあ、ひとりひとりどういう話を書くか、あげてく？

△t：えっここでもう申告するの？ 「私どういふの書きます」って

藍那：今ぱっと思いついたことでもいいし

△t：僕が思いついた提案としては、

まあヤンデレを書き進めるとバッドエンドになってしまうだろう、ということなので、さっきいったDV男の場合以外で、ヤンデレ同士がうまくいく話とか、あと、すごく頭がいいっていう……

あ、これメンヘラじゃなくてヤンデレの話でいいんだよね？

ゆう：メンヘラは関係ない

△t：スペックが高い、ではなく、

「頭がいい」ヤンデレとはどういう意味なのかっていうのを個々人で解釈しつつキャラクターを書くと、面白いことになるんじゃないかなって

藍那：スペックの高いヤンデレ？

△t：そんなの、「萌え要素」みたいな感じでぱっとやったらすぐ書けるようなもので、そうじゃなくて

ゆう：「失敗しない」ってこと？

△t：ドラマ性を持つのであれば失敗するわけじゃん、

でも失敗するはずがないようなキャラクターというか、ヤンデレにならないはずのキャラをヤンデレとして書くのが……無理をしたほうがおもしろいんじゃないかなって

ゆう：はあ、無茶言いますな

△t：まあ、すごい勢いで自分の首を絞めてるけど（笑）

ゆう：城野は書くの？

城野：書くとしたらどうするかなー、
頭いいヤンデレを書くんじゃないかなやっぱり。
あとは、視点の入れ替えをやってみてもおもしろいんじゃない？

△t：主人公と、三人称視点と、あとはヒロインとか、あるいは介入してくる人とか？
色々キャラを配置できるわけ。またはヤンデレをどこに入れるか。
介入してくる人がヤンデレだったら.....

ゆう：こわっ（笑）

城野：やばいやばい（笑）

らいち：ヤンデレしかいない世界でしょ？

△t：ヤンデレオンリーワールド（笑）

△t：「世界が100人のヤンデレだったら」

——一同、爆笑

△t：今ので思いついたんだけどさ、
ヤンデレ的な愛情をどこに向けるかっていうのも、
愛がさ、人間同士に向くのか、それとも世界、地球への愛、とかさ、earth&ecologyみた
いな.....動物愛護だとかさ、

ゆう：自然保護団体だったり

△t：まあそれってヤンデレじゃん。そういうのも意外とありなんじゃないかなって

城野：ひとつのヤンデレの形として書くのはありだね

ゆう：人間じゃなくていいの？

△t：性的倒錯をすでに持っているヤンデレだったら、成立するんじゃない？

ゆう：ああ、どっちもっていう

△t：ヤンデレであるがゆえに性的倒錯、なんじゃなくて

ゆう：eco団体とか、最初につくった人たちはヤンデレかもよ

△t：メンヘラの「周りにアピール」てのは「私」を見てってことだけど、
動物愛護団体のアピールは、「お前やめろよ」みたいなことだから、それは違うんじゃないかな

ゆう：まあでもね、「私たちこんなに頑張ってるよ」ってのもあるかも

城野：「こんなに頑張ってるんだからお金ください」ではないけど

△t：女子高生がさ、ちっちゃいハムスターみて「うわーっカワイイー！」ってというのは、
「可愛いって言ってる私を見て」っていうあれでしょ？

城野：それはメンヘラじゃない？

ゆう：「かわいいかわいい」って言って気を引いてるってことじゃない？

△t：「猫かわいい」って言って、「こういう可愛いものを可愛いって言えちゃう私、可愛いでしょ」みたいな

らいち：言うかな……（笑）

ゆう：みんな見て（真顔）

△t：女の子社会の、よくある（笑）

ゆう：それがあからいじめとかになるのかなーって

△t：「あいつ可愛いアピールしやがって」みたいな

らいち：「可愛い」って言っただけでさ、可愛いって思える？

鈴：思ってるやつはいるよ？

△t：いやいや論理的に思えるかじゃなくて、そういうアピールをしてるやつ、いるよねって

ゆう：僕はいると思うよ

城野：経験とかそういうのじゃなくて、こういう現象あるよねって

△t：むしろ言ってしまうえば、馬鹿だから論理的に考えられない

ゆう：そういう馬鹿な女子高生何人もいるよね

△t：すべての私以外の人間に「私を愛してくれ」っていうアピールはメンヘラ的行為であって……どうなんだろう、捨てられている子犬をみて「かわいそう」って言って泣くのは、メンヘラか？ あああメンヘラっぽいなあ……（笑）

城野：メンヘラっぽいなあ（笑）

ゆう：それって一人で泣くの？

△t：うん

城野：一人でだったら……

△t：あああちゃうちゃう、違うんだよ、これはその、違うジャンルのメンヘラなんですよ

城野：説明どうぞ

△t：ぎりぎり統合失調じゃない場合は、すべてのものに感情移入しちゃって、例えば「鳥が鳴いてる」っていうので寂しくなったり切なくなったり、死にたくなるみたいな。俺はこうしてしゃべって二酸化炭素を吐いて、地球の汚染をしてる、ああこんなのじゃだめだ、っていうのはメンタルヘルスを志しているからメンヘラとはいうけれど、恋愛承認欲求的な今の議題のメンヘラとは違うかな。でも、今言ったこともメンヘラであることは覚えておいてほしい。

城野：以上、メンヘラからの意見でした

△t：テレビ見ながら泣いちゃうんだよ（笑）

ゆう：気持ちが悪い（笑）

△t：そう考えると、色んなジャンルを含めたメンヘラで、動物愛護団体がメンヘラと呼ばれても

ゆう：まあそれが入っちゃうならそうだよな

△t：今回の議題の、承認欲求的なメンヘラっていうのはまたちょっと違うけど

ゆう：全然違うね

△t：前はけっこう「メンヘラ」って言ってほいほいまとめちゃってたけど、まあメンヘラにも色々あるんだぜって

ゆう：そう、ヤンデレの方は広くとりすぎたのにメンヘラの方はちょっと狭く、まあそこがミスだったよね

らいち：メンヘラのごとはよく知らないから……

城野：あの、いまなんででるたていーに刺激をあたえたの？（笑）

△t：色々教えようか？

城野：やばいやばい（笑）

らいち：いやだって文芸島で初めて「メンヘラ」という言葉を知ったし（笑）

ゆう：メンヘラを初めて見たんだって文芸島で。珍しい生き物だよな

△t：幸せな世界で育ってきたんだね

城野：幸せな世界で生きてきたのはいいことだよ

△t：メンヘラ界限なんてのぞかない方がいいよ

らいち：これまで「頭おかしいな」っていう風に思ってたのが、メンヘラだったのかなあ

ゆう：っていうことに気づいたんだ、なるほどね

らいち：メンヘラっていう言葉とか存在？ 定義？ っていうものを知らなかった、っていうだけで

城野：経験談として見てきたことはあるってことか

△t：まあカテゴライズって暴力だから、色んな多様性があるわけじゃん、個性とか。
そういうのを、「あいつメンヘラだ」って

ゆう：ステレオタイプだよ

△t：押し込めるわけだから。だから今ものすごい勢いで暴力を発しているわけですね

城野：そうですね

△t：言葉を使うとか、ものを書くとかっていうことって
結局暴力だって話ですよ……すごい収束つかなくなっちゃった

城野：やめとく？ やめとくかあ（笑）

△t：あと2時間くらいかかるから（笑）

城野：えっと、1時間でしたっけ

藍那：はい。あと4分くらい

城野：じゃあなんか締めてください

ゆう：なんか言うことありますか

城野：編集長話してませんけど相変わらず

藍那：そうだな……なんか進んだ？

城野：うーん、創作でこういう書き方もあるよねっていうのは深まったね

らいち：一応ヤンデレ座談会ではあるけど、

ヤンデレの話をしていくとメンヘラの話も出てきて、それを今回はけっこう言及したかな

ゆう：メンヘラのほうが身近だからね！

藍那：メンヘラ人口のほうが多いよ

らいち：それはー

⑨ 這い寄るメンヘラ

藍那：這い寄るメンヘラ……

らいち：すごく嫌なんだけど（笑）

秋野：メンヘラは身近だし、居たし

鈴：居るしね

△t：「メンヘラ座談会」を終えて、みたいな（笑）

ゆう：メンヘラは身近なものですね（小並感）

城野：ヤンデレというよりメンヘラ座談会でしたね

△t：そういうものがあるっていうことを

城野：前は「ヤンデレとメンヘラを間違えないようにしよう」だったしね。

今回は、ヤンデレを書く上でどうしたらいいか、みたいな。

まあいうべきことは全部挙げたかな。

ゆう：（ヤンデレ作品）書く人？ 誰？ …… 3人しかいないよー？

△t：評論は？

ゆう：いいね。「メンヘラ座談会を終えて」？

△t：俺いっぱいしゃべったから、「あいつがいかにかクソみたいな発言をしていたか」みたいな（笑）

藍那：というわけで今回は

城野：はい

ゆう：はい

藍那：また開きましょっか（笑）

城野：3回目！？

らいち：ヤンデレについてはもういいんじゃないかな（笑）

ゆう：他の議題でやりたい

らいち：メンヘラのほうが広いんじゃない？

△t：広すぎてどうしようもないくらい広いよ（笑）

らいち：「メンヘラ」ってあっちこっちで飛び交ってるけどさあ、幅が広すぎてどれがどれだか

△t：なんでもメンヘラっていうけど「ふざけんなよ精神科に二か月通ってから言えよ」って

らいち：「メンヘラ」って言えばいいってもんじゃない

ゆう：そうやって分けしてる感じはあるよね。自分とは違う人間を「あいつはメンヘラだから」って

△t：あとは一、

自分が「気持ちが弱っちゃうんだよね」みたいなことを、近くにあった言葉として、「メンヘラ」、あっいいいなー、っていう風に使う。便利な言葉でカテゴリづけるっていう

藍那：季節性ヤンデレ、とかは？

ゆう：あー、季節性メンヘラはいるなー。

らいち：ヤンデレに季節があるの？（笑）

ゆう：俺、夏けっこうやばいんだけど

△t：夏よりは冬かな。家から出れないじゃん。

太陽の光を浴びるっていうのがかなり重要なんだよね、神経的に

城野：身体的な話でね

ゆう：太陽の光なのか

△t：あとは、外を歩くと、色んなものが見えるじゃん。

「いつもと違う」っていう、違うものを見ると脳にすごく刺激がいくんだよね。

ゆう：季節っていうか、その人の行動パターンによるところが大きい……ああ、傾向として冬が多いってことか

らいち：暑いと外出たくなくない？

ゆう：そういう人もいると思う……そうか北海道か

※△tの出身地は北海道

△t：あと冬って景色が変わりにくい。夏だとさ、祭りだとか、普段と違うものが多い

ゆう：期間っていうか、例えば冬休みより夏休みの方が長いとか。北海道は知らん

△t：僕の場合はひきこもることによってどんどんテンションが低くなっていく最悪のパターンじゃん。

……無理やり外出て誰かとしゃべったりすると、意外と気分がよくなるというか

ゆう：誰か家に呼びなよ

△t：やだ

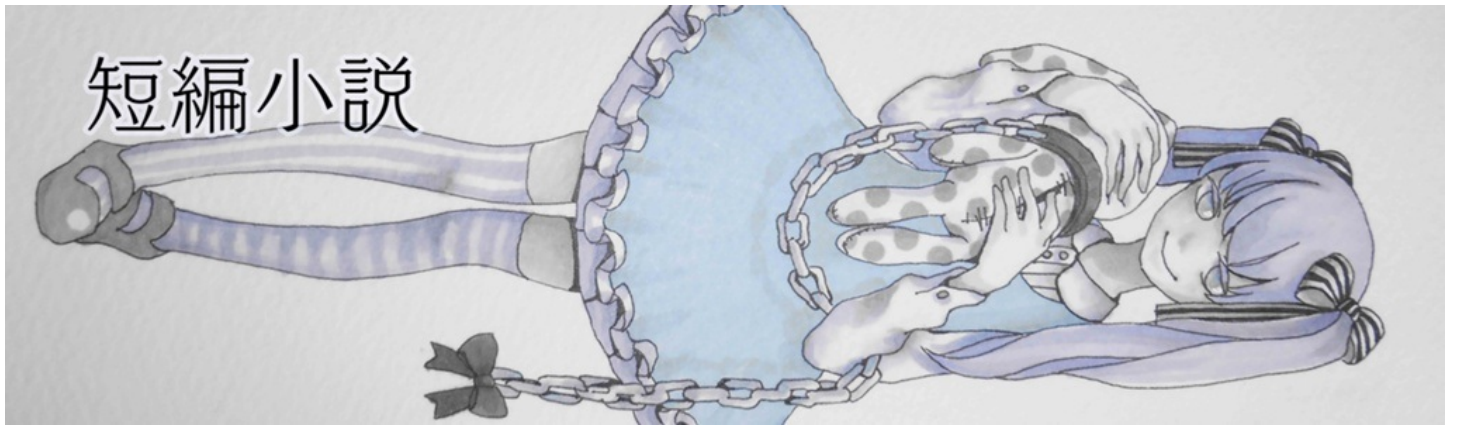
藍那：それじゃあみなさん今日のまとめは「家から出よう！」ということでよろしいですか

ゆう：健康的に生きましょう

城野：健康的に生きればメンヘラにはならない

藍那：以上、座談会でした。ありがとうございましたー

―― 一同、「ありがとうございました」



重たさ by△t

「彼氏と別れた」

歩子は涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながら玄関先に立っていた。

「別れたって、でもほら、この間まで仲良さそうにしてたじゃない」

嘘だった。僕は歩子が恋人と仲良さそうにしている姿なんて見たことがなかった。というかそもそも歩子に恋人がいたことすら知らなかった。

「彼氏と別れてどこにも行くところないからここに来たんでしょ！」

「いや、えーっと、ううん、よくわかんないけど家に帰ればいいじゃん？実家ぐらしだったでしょ？」

努めて冷静に歩子に問うと、彼女は取り乱してもなお重力に従ってなめらかな黒く長い髪をさらりとなびかせながらスムーズな動きで玄関に入り扉を閉め鍵を掛けて靴を脱ぎ僕の部屋に入りながら「だって喧嘩してるし今は帰れない」と言って答えた。

「じゃあほら、友達の家に行くとか」

歩子の家のすぐ近くに彼女の友人の家があって、恐らく幼少の頃から付き合いがあるということ僕にはさる筋からの情報で知っている。インターネット社会バンザイである。

「マユの家行ったらすぐ連れ戻されて終わりだし」

馬鹿みたいに大きな鞆を床に放り、上着を脱いでハンガーに掛け、自然な流れで手洗いうがい。「あー喉いったー冷蔵庫開けていい？」と言いながら手は既に冷蔵庫を開けている。「泣くと喉も頭も痛くなるしお腹減るよねーってかホント何も無くない？なにこれモンスターカオスって」と言いながらオレンジの電灯に照らされる歩子の白い肌が美しく、柔らかそう。君がエナドリの何たるかを知らないように僕はマユとかいう君の友人を知らない。

歩子が語るところによると、まず始めにあったのは弟との喧嘩で、歩子の大事にとってあったアイスが弟が食べたことに腹を立てたところから始まった口論が急速に熱を帯び、極めて論理的に弟を攻め立てると弟の方も反撃、日頃から溜まっていた鬱憤を一挙にぶちまけ、アイスの一件に関係ないこと遠く過去の話まであることないことちくちく鬱陶しくまくし立て責め立てられたらしい。「小学校の頃の夏休みの宿題の話とかどうでもよくない？」。全てがどうでもいい。しかし歩子にとってはどうでもいいはずもなく、彼女はまず母親に助けを求めたが、夕方過ぎの母は一瞬で平らげられ感謝も慰労の言葉もない家事に追われ生返事、挙句「晩御飯の前におやつ食べるのやめなさいよ」と歩子が叱られる始末で、とうぜん歩子の怒りは静まらない。どうしようもないので「ちょっと聞いてよお父さん」と今度は父親に助けを求める。

「ねえお父さんもおかしいと思うでしょ？私を買ってきたんだよあのアイス。他にもいっぱいあったじゃんねえ？自分の分には名前でも書いておけとかそんなサツバツとした家族なんてやだよ私」

「まあな一気遣いは大事さな」

「でしょ？ホラ！ビール飲んでないでもっと言ってよ！」

「しかしまーなんちゅうか、ユウスケも毎日部活で疲れとるしなー」

「ちょっとそれどう言うこと？私が頑張っていないってこと？」

「やや、そう言うんじゃないくてな。あーまあなんだ、野球部ってのは大変だから」

「なにそれ、お父さんが野球部顧問だからって甘やかしてるだけじゃない？小学校と高校じゃ違うし、だいいち私だって今日もさっきまでバイトして変な人の相手とかして毎日けっこう大変なんだよ！」

「まーバイトはバイトだろ？学生の本分は学業なわけだなー」

「ちょっと！体動かして疲れてるとか言い始めたのお父さんでしょ！私だってちゃんと勉強してるし！」

「あー、んー。まあそうなんだけどな……ん？でも今日は朝遅かったみたいだけど」

「そうなんですよお父さん、今日も起こしに行ったんですけどね、今日はシフト昼からだからーって。行く直前までぐっすり」

「学校は？」

「いや、それは……」

「そーだよ、ねーちゃんぜんぜん学校行ってねーよ」

「うるさいアンタは黙ってて！」

「そうやってすぐ怒鳴らない、歩子はお姉ちゃんなんだから」

「『お姉ちゃんだから我慢しなさい』とか言って、そういうの古いと思わない？」

あくまで原告側からのみの申し立てだから、どこまで信憑性のあるものかはわからないが、確かに彼女の怒りも分からなくはない。ささやかなきっかけも家族全員が敵に回れば怒り悲しみも強まるだろう。最後の「お姉ちゃんだから」というのも実にいただけない対応である。まあ別に古くないと思うけど。

「て言うか逆にバイト入れて休みもあって単位も取れるような割り振りしてるわけだから、むしろ優秀だと思わない？」

「単位取れてるの？」

「……そういうことじゃないじゃん」

歩子はそう言いながら座る場所を決めかねている。「そのへん座っていいよ」と言うのと「ありがと。あ、冷蔵庫から出しちゃったけどこれもらってもいい？」とモンスターカオスを僕に見せる。いいけどそれ眠れなくなりますよ。

「大丈夫じゃない？怒って泣いたし疲れて眠れるよ。ってなんか赤ちゃんみたいだよね」

そう言って笑いながら缶を開けると微炭酸の中身が少し手にかかりテーブルに散る。

「あ、ごめん！拭くものある？」

僕はベッドサイドのスコッティを何枚か取ってテーブルを拭き、箱の方を歩子に渡しながら「でもまあ、僕みたいにバイトもしないで仕送りにすがつて、それでも毎日ひーひー言ってる身からするとよくやってると思うよ」

「でしょお？てかキミも働きなさいよ」

へいへい、とよくわからない笑いをしながら僕は歩子にもう少し踏み入ったことを訊いてみる。

「でもさ、なんでこのタイミングで彼氏とも別れたの？」

ううっ、と少しむせてまたティッシュを取る。「それ言わなきゃダメ？」。まあ別にいいですけども。

「いやーなんかさ、色々ヤになって、っていうか思い知らせてやろうと思って家出たのはいいけど特に行く場所もないし、そしたらカズヒロから着信きてて。じゃーもー行っちゃうかーみたいな」

うんうんと相槌を打ちながら冷蔵庫からトマトを出してスライスしてチーズを載せる。

「彼氏んとこ着いたら玄関真っ暗で、鍵開いてるから家に居るんだろうけど、なにになにどうしたの？って電気つけたら部屋の奥で体育座りになって泣いてんの。とりあえず荷物置いてどうしたどうしたーって頭なでたらパシって振り払ってさー。さっきまで泣いてたわけじゃん？私。でもそれどころじゃないからエアコンつけてカーテン閉めて、とりあえず落ち着いて話してくれるまで待ってみたのね」

僕も冷蔵庫からモンスターカオスを一本取り出し、スライストマトをテーブルに置いて座る。四角い木製テーブルの対辺、真正面にならないように少し右にずれた位置。

「そしたらすっと顔上げて、『別れよう』って。意味分かんなくない？ってか意味分かんなかったから私も『ヤダ』って即答しちゃったんだけど、そしたら『そういう優しいところがだめなんだ一俺にはもったいなすぎるんだー』とか言うの。ちょっとイラッとしたけど、でもそういうちょっとした苛立ちってさ、なんていうの？愛的なものでカバーできるもんじゃん？だからま

あいだろう、聞いてやろうって黙ってたのね、そしたらまた『そうやって俺の話を聞いてくれる、優しく頭撫でてくれる、そういう優しさが俺には大きすぎるんだー』って。どうしろって感じ」

「まあ、そうだね」と言いながら僕はトマトを一切れつまみ、モンスターカオスを一口飲む。歩子もトマトを囓って飲み込む。

「でもさ、そういう『僕にはもったいなすぎる』的なってよくある相手を傷つけずに振るための口実じゃん。だから他に好きな人でもできたのかなーと思って、あ一家族に裏切られて恋人に振られて悲劇だよーとか浸りそうになってたら、彼どうしたと思う？私の後ろにおいてあったギター取って『それでも俺はお前のこと好きだから、その気持と、今までの感謝と、それから別れの決意を込めて……歌います』って。いや笑うよね！でもさ、いや実は、前々からこういうこと結構あってさ……まあそういうとこあんのよ。ことあるごとに歌うの。で、今回はどんな歌なんだろうってか、即興っぽい歌詞の中にならうっかり無意識の本音出てくるんじゃないかなと思って聞いてたの」

歩子の語りのムードがそれまでと変わり、少し切なげになったので、僕は笑いかけた表情を引き締める。

「歌はさ、まあなんていうか、あんま覚えてないから再現できないけどさ……結構いい歌だったのよ。で、あ一本気で別れるつもりなんだなあってちょっと本気で悲しくなってきた。そしたらサビに入って彼も私も感極まってきたあたりで隣のヤツが壁をガン！って。『うるせえぞ！』とか言うから私が『お前がうるせえんだ！』って立ち上がって怒鳴ろうとしたら持ってきた鞆に足引つ掛けて転んじやってさ、痛いし悔しいのに彼まだ歌ってんのね。泣きながら。いや泣きたいののはこっちだよ！ってもう悲しいやら悔しいやら腹立つやら痛いやらでもう感情ぐちゃぐちゃになって。立ち上がろうとしてコケた時に足に引っかかった鞆の紐見て『あ、そういえば家出してるんだって』って思いだしたからそのまま彼ん家も出てこっち来ちゃった。……みたいな？」

ラストスパートを一気に語り終えた歩子は「疲れちゃった」と言って缶を空ける。僕もつられて飲むが、炭酸は一気に飲めない。あっけらかんと「みたいな？」なんて言っているが、僕が最初に見たのは泣き疲れた赤い目だったし、たぶん家までの道のりでいろんなことを思い出して泣きながらここまで来たのだろう。今日の出来事以外のいろんなことを。

「まあ人の心っていろいろだからさ」と言って歩子が立ち上がる。「もう別れるって気持ちも、その人の中ではもう確定事項なわけじゃない？」そう言いながら冷蔵庫を開ける。「だから待って一行かないでーってすがったり引っぱり張ったりするのは違うかなっていうか」。モンスターカオスをもう一本、テーブルに置いて歩子は僕の真正面に座るので、僕は相槌を打ちながら左に少しずれる。「もちろん引き止めるっていうか、心のノックはするよ？でもやっぱり、こじ開けるのは違うよね、って」

歩子の白い綺麗な首が波打つ。僕はそれを眺める。

「わりと淡白なんだね」

「それさーよく言われるんだけど別に私ぜんぜんサバサバしてないからね？感情の切り替えも下手くそだし、っていうか一回好きになってるわけだから、全開で心開いたのをもう一回おとなしいところまで閉じるのとか超時間かかるよ」

「じゃあまだ好きなの？」と僕が訊くと「そりゃさー……」と歩子は黙ってしまうので「まあそういうのもいいんじゃないかな。人の心はいろいろだし、人の心にどう接するかもいろいろだよ」と僕は返す。それからトマトをもう一切れ。へへへ、と笑う歩子。

「っていうかこれなんでトマトなの？」

「うちでは酒のつまみはいつもそれだよ」

「つまみにしてもおかしくない？」

「そんなに美味しそうに食べながら言っても説得力ないよ」

歩子は「でもさあ、素材以外になんもないじゃん？食べ合わせがよっぽどじゃない限り不味くはないでしょ」ともぐもぐ言う。まあ確かにそうかもしれないけど。「あ！そうだよ、お酒ないじゃん。これじゃあさ、つまみとして成立しないじゃん！」

確かに家には酒を常備していない。特に下戸だというわけではないのだけど、一人で飲んでいても楽しくはないからね。

「えーじゃあいいじゃん。私いるんだし、飲もうよー」

「それってつまり買ってこいっていうこと？」

「そういうことです」

そう言って歩子はクッションを抱いて身を縮めるのでエアコンの設定温度を二度上げる。財布を確認すると幾らか手持ちはあったので「なにがiiiiの？」と訊くと「なんでもいいよー」と

返答。なんでもいいというのが一番困る。

「なにを選んでくるかでその人のセンスとか、その人が私をどう見てるのかとかわかるよねー」と、歩子が悪戯っぽく笑う。試されてるんですか、僕。

靴を履こうとすると後ろから歩子がやってくる。

「ねえ、ちょっとお風呂とかかりてもいい、かな？」

泣いて頭痛くてさ、と言うので、だったら寝てたほうがいいんじゃないかと提案すると、ここまで来るのに汗をかいたのでそのまま寝るのは気持ち悪い、とのことだった。シャワーを浴びて気分がすっきりする感覚というのはわからなくもないので、タオルを渡して「どれくらいである？」と訊く。

「じゅう……あー十五分！十五分であがるから！ごめんねー」

「あいあい」

「ありがとーう」

持ち物に携帯電話と煙草とライターを追加して、今度こそ靴を履く。鍵を外してドアを開けると、もうすっかり寒くなった夜風が部屋に入り込むので、小さく開いた隙間から身体を抜くようにして外に出る。歩子の「いってらっしゃい」と言う声の最後はドア越しになってしまった。

コンビニと家、買う時間を含めてもせいぜい往復十分くらいだろう。そこまでのルートから少し逸れた所にある公園のベンチに腰掛け、煙草に火をつけたところで携帯灰皿を持ってくるのを忘れたことに気づいた。一応ポケットの中を探ってみるが、やはり無い。煙の混ざったため息をつくとポケットに入れたままの手に触れる携帯電話が震える。

「私はどうすればいいですか。」

そんなことを言われたところで僕の方こそどうすればいいですかといった話で、返す言葉も無く、無いものは返せないの、ひとまず既読の知らせだけ付け携帯電話をポケットに戻す。その手を抜く前にまた振動。

「私には貴方の気持ちがわかりません。」

わからないならもういいだろう、と思いながら、そのメッセージに今度は既読も付けず、また携帯電話をポケットに戻す。だいたい僕の方の気持ちは彼女にはっきりと伝えたはずだ。それでもなおわからないというのなら、彼女の方の問題なのではないだろうか。煙草を踏み消して立ち上がる。

コンビニまでの道を歩きながら、僕は彼女への言葉を考えていた。人はだれだって主体なのだから、その意思を尊重することはたしかに正しいのだろうけど、しかしそれが恋愛関係になったとき、僕は僕が誰かの客体になるということを受け入れなければならない。同時に、僕が誰かを客体にしていることを認めなければならない。無理を許容せよということではないにしても、その無理があるときは許し、またあるときは許されないということを実感せねばならない。その、ときに許し許される関係を保つものが愛なのだろう。そしてそれが僕と彼女の間ではうまく機能しあえなかったということなのだ。

求める恋心と許す愛情。とは、ちょっと気障っぽいだろうか。

まあいい。

たぶんそういうナイーブでセンチメンタルな言葉はおおよそが「まあいい」で済ませられるものだし「まあいい」で済ませるべきものなのだから、深く考えるものでもない。深く考えるべきでないというより深く考えても仕方のないものだから、深く考えたいときにだけ深く考えた気になればそれでいい。

様々なことをそうして先送りにしながら、先送りにすることに罪悪感を覚えながら、そんな自分を正当化しつつ、ビールを二本手に取って「あ、でもビールが苦手っていう人もわりといるしどうだろう」と少し悩む。そもそも歩子はどれくらい飲むつもりでいるのだろう。いっそ自由に調節ができる方がいいだろうからとウォッカとオレンジジュースを買って帰ることにする。つまみはまあ、いいだろう。

帰り道、時間を確認しようと携帯電話を確認すると彼女から更にメッセージが来ていた。

「私がいらないのは私の気持ちなのかもしれません。」

「誰だって自分の気持なんて全てわかり切ることはいけませんよ。」と返すが、しかしそれが彼女の望む答えではないだろうことは、はっきりとわかる。「気持ちが定まらないときは、ひとまず眠ってみるというのも手です。」とは、全く他人行儀で愛想がないなと思うので、送信せずに削除する。何かを伝えるということには常に責任がつく。目に見えないから気づかないというだけで、伝えられたものには重たさがある。

僕には彼女のそうしたところが耐えられなくなってしまったのだ。便利な言葉の便利な表現に、無意識に頼ってしまっている。言葉は使われれば使われるほど強さを失っていく。言葉自体が

新しかろうと、新しい言葉に頼ってしまうという態度自体の安易さ。考えるということにこだわるあまり、考えることの素晴らしさにとられるあまり、考えているというポーズをとることで満足してしまっているのではないだろうか？

僕はそういう彼女の姿を見ていることが耐えられなくなってしまった。その姿はそのまま、僕自身でもあったから。

家の扉を開ける前に、風呂場の窓の様子から恐らく歩子は既に風呂から上がっているだろうことはわかったが、脱衣場なんて親切なものなどないワンルームで、たとえ風呂から上がってしようと彼女が今どういう状態であるのかまではわからない……と、桃色の妄想に駆られつつも、がちがちとわざと大きめの音を立てて鍵を外し、扉を開く。室内から暖かく湿った空気が漏れ出てくる。

「あーおかえりー。ドライヤー勝手に使わせてもらっちゃった」

「うん、いいよ。ブラシとか鏡とか無いけど平気だった？」

「いいよいいよー。っていうか私そういうの使わないし」

なら良かった。ひとまず買ってきたものを冷蔵庫に入れ、上着を脱いでハンガーに掛ける。「ほらほら、外寒かったでしょ？ここ、あったかいからおいで」と言うので、僕はもぞもぞとエアコンの風の下、歩子の隣りに座る。乾きかけた彼女の髪越しにドライヤーの風が当たる。特になにがというわけではないが、十分に温まったので立ち上がり、手を洗う。

「コップ何でもいい？」

「いいよ一気にしないよー」

コップを二つ持って冷蔵庫からウォッカとオレンジジュースを出す。どうしてわざわざ冷蔵庫に入れたんだろう。スクリュードライバーを作りながら自分の行動のバカバカしさに笑いが漏れる。

「どうしたの？なんかちょっと気持ち悪いよ？」「いや、なんでもないよ」「しかしなんでもいいとは言ったけど、ほんとになんか色気ないね。うがい用！って感じ」「だってこれしかなくてさ」「ちょっと可愛いのがまたなんかムカつく」「それは母さんに言ってください」「ま、いいけどね」

酒を入れるのなんて相当に久しぶりだったから全く感覚がわからない。とりあえず目分量でコップに七分目くらいまでにしておいて、濃かったり薄かったりしたら自分で調節してもらうことにしよう。

「あーたしかに若干濃いかも」

歩子はオレンジジュースを継ぎ足しながら気分良さそうに鼻歌を歌う。「それなんの歌？」と訊ねると「うーんわかんない」と答えるが、僕はその歌が別れ際に彼が贈った歌なのではないか、という予感がする。

「っていうかさーお酒の方もなんでもいいとは言ったけど、そこで選んでくるのがスクリュードライバーっていうのもなんだかなーって感じだよ」と歩子が笑う。なにか駄目だったのだろうか。「駄目ってこたないけど。あれ？知らない？スクリュードライバーの別名」。残念ながら全く知らない。「なんだ知らなかったのか。わざと狙ったのかと思ったんだけどな」

真正面から左にやはずれた位置で歩子が熊のプリントされた黄色のうがい用コップを両手で大事そうに持ちながらスクリュードライバーを啜る。シャワーで温まった頬に指す朱、しっとりとした髪。その姿について思うことは、ない。ないです。

歩子におかわりを作りながらつまみが切れていたことに気づいて台所に立つ。そのついでにテーブルの上の吸い殻がたまった灰皿も持って行く。手を洗ってトマトをとんとんとんチーズをはらはらり。

「あれ？煙草吸うんじゃないの？」

皿をテーブルに置くより早くつまみをひょいと持ち上げ歩子が僕に言う。

「いや、煙たいのはアレかなと思って」

「気にしなくていいよそれくらい。私煙草の煙とか平気だし、むしろ煙草の匂いは好きだから」と言う言葉の語尾が徐々に小さくなるので、ああ、彼も煙草を吸っていたんだなと、つられて僕も感傷的な気分になる。ほろ酔いでセンチメンタルになってしまったもんだからついうっかり「彼はどんな煙草吸ってたの？」などと口走ってしまうし、歩子は歩子で「知らない。なんか白と緑のやつー」と声を湿らせる。

じわりと冷えた空気が流れずに滞留する。

「じゃ、ちょっと失礼」。この空気に耐えられなくなって負けを認めた僕は灰皿を置きっぱなしのキッチンに移動する。シンクで山盛りの吸い殻を蓄えている灰皿を眺めながら、肝心の煙草とライターを持ってきていないことに気づいて、どこに置いたかな、と居間の方を見ると今にも泣

き出しそうな歩子と目が合う。

「こっちで吸いなよ」

「それもそうだね」

吸い殻を燃えるゴミのゴミ袋に移して空にした灰皿を持ってまた歩子の向かいに座る。テーブル上の煙草の箱を開け一本、ライターをカチカチしていると「ねえ、なんで真正面に座らないの？」と歩子が訊いたところでようやく着火。「んー？だって恥ずかしいじゃあないですかー」と啞えタバコで返答。占い師だって真正面に座らないのだ。「占い師が恥ずかしがってたらおかしくない？」。なるほど確かに。相手に心を読まれないためとかだったかもしれない。「それじゃあ占い師だって相手の心読めないじゃん。占い師なのに」。それはどうだろう。正しいような、正しくないような。「ま、どっちでもいいんだけどさー」と言いながら座ったままの格好で身体をズリズリ僕の隣へ移動させる。おっと、これは、なんでしょうか。「さてさて、なんでしょうかね？」。ひとの心なんてわかり切ることはない。それがわかればこの世の苦勞はうんと減りそうな気がするんだけどね。あるいはそれが、単に別種の苦勞に変わるだけなのかもしれないけれど。

「だってさ、正面だと恥ずかしいいでしょ？隣なら良くない？」

「ちょっと酔っ払い過ぎなんじゃないですか」

「酔っていると言われれば、酔っているような気がしなくもない」

「寝た方がいいですよ」

「酔わせてベッドへ誘うとかやっぱ完全に狙ってるよねーそれも傷心の女の子をさー」

「そんな軽い女の子だったんですか？」

「ちょっと！体重の話はしないでよね！」

「そういうことじゃないけど」

「でもダイエットはしようと思ってるー」

「そういう、面倒くさい話題に行きそうになったらするって話逸らす所、良いと思います」

「へへへーありがとー」

「まあ、今のは完全に自分から振った話題だったけど」

へっへっへとだらしない歩子の笑い。むず痒いさっきまでの空気が変わり、ほんわりと落ち着いたところにチャイムの音がりんごーん。

「え、もう超夜中じゃん、誰？」

「わからない」と答えるより早くドアが開く。いつもの癖で鍵を掛けていなかった僕が悪い。「相変わらずですね。夜だけでも鍵は掛けておいた方が良くと何度もー」と言う声は僕がよく知った彼女の声。言いかけて止まった声の主の視線が刺さるのは、僕か、歩子か。

ため息を吐き「そういう、だらしないところですよ。ありとあらゆるものがどうでもいいという顔をしているわりに自分に向けられる好意に敏感で、でもいざそういう空気になったらその後のことに怖気づいて距離置きたがったり、そのくせ淋しい時には誰かが自分に話しかけてくれるのを待っていたり、自責の念にかられてみたり、でもそういう悲劇のヒーローみたいな感情を憎みすぎるあまり、耐え切れなくてまたメランコリーになる、貴方のそういう、周りやー周りの人や物や出来事や、自分自身に対してだらしないところが、本当に……」

彼女は玄関に立ったままで喋り続け、歩子はなにが起こっているのかわからないという顔で、僕はなにが起こるのか困って固まったままで聞いている。

「でもわかったんです私。私は貴方のことがメンヘラだと思ってました。貴方のことがメンヘラのどうしようもないクズだと思ってました。そして私もクズでメンヘラで、私と貴方は共依存関係の満ち足りた関係だと思っていました。貴方と私の閉じた世界で二人はずうっと幸せにしているのだと思っていました。だけど違いました。私は間違っていました。貴方がメンヘラだということはたぶん間違いがないのだけれど、私、だぶんメンヘラじゃないんです。だから」

彼女は俯いて言葉を止め、靴を脱いで部屋に入る。俯いたその視界の中に間抜けに座っている僕が入る。

「だから私には貴方とずっと一緒に美しい関係を築いていくことができない。私には貴方を救うことしかできない」

「ねえ、ちょっと……あなたに言ってるのかわかんないし、なんて言うか、ちょっと、気持ち悪いよ」

威嚇が入った言葉に彼女は歩子の方を一瞥するが、何も言い返すことはなくまた僕の方へ向き直る。その顔は微笑んでいる。

「ほら、ね？他者なんて不要なんですよ。貴方が言っていた通り。だから救います。貴方のことを愛しているけれど、貴方のことを愛しているから、貴方の魂を開放してあげなくてはならない

。全ての他者から。そして私からも」

そう言って彼女がポケットから出したナイフはまっすぐに、強い意志で僕の胸に突き刺さる。痛みよりも、胸にのしかかる彼女の重たさが僕の中に広がる。

「私、上手に出来たかなあ。上手に、貴方を愛することができたかなあ」

悲鳴を上げたり取り乱したりするより先に、彼女からナイフを取り上げ、救急車か、あるいは警察に通報する歩子の強さに感心しながらも、僕の腕の中から聞こえる彼女の声に僕はどうしようもなく愛を感じる。彼女のその全てが、美しさから醜さまでの全てが僕のことを、救おうとしている。僕は僕を全力で愛してくれる彼女の重たさを全身で受け止めることで自分自身の重たさを感じることができる。でもこういうとき、どんな声をかければいいんだろう。距離を置こうといった僕の言葉に従って、一度うんと離れた彼女の思いは、助走をつけて僕の胸に突き刺さったわけだ。全く、本当にどうしようもない。ありがとうでもごめんなさいでもさよならでもなく、愛しているでもないのだとしたら、どうすればいいのだろう。

まただ。

そうやってまた重要な問題を先送りにしている。

だけだとぶん、今回はそんな自分を正当化している余裕は無く、先送りされた問題を解決するタイミングも与えられない。

ありがとう世界。

さようなら世界。

もう無いかもしれないけど、また会う日まで。

僕はゆっくりと重たさを失う。



2013年12月24,25日には、web上で「ヤンデレクリスマス」が行われました。



いじわる……
髪切っちゃうもんね！



byヒロマサ
(C)KMIT

……今どこにいるのかなあ
……会いに行ってもいいかなあ
でももう時間も遅い
今からなんて迷惑だ
でも昨日からずっと我慢
ねえちよつとだけ電話してもいい
君のことばかり考えちゃってさ
何も手につかないんだけど、
今日ってクリスマスだよね？
待ちくたびれちゃったからさあ
ほら、邪魔者はもういないよ

参考文献一覧

ヤンデレ企画にて話題に挙がった作品・文献の一覧です。

《作品》

- ・ SHUFFLE!.....空鍋（シーン呼称）
- ・ School Days.....桂言葉、ナイスボート（シーン呼称）
- ・ 魔法少女 まどか☆マギカ.....暁美ほむら
- ・ 新世紀エヴァンゲリオン.....渚カヲル
- ・ ひぐらしのなく頃に
- ・ 未来日記.....我妻柚乃
- ・ 鋼殻のレギオス.....クラリーベル
- ・ 悪の教典
- ・ デュラララ！！.....セルティ
- ・ 新約聖書.....サロメ（ヘロディアの娘）
- ・ ラストフレンズ.....及川宗佑

《文献》

- ・ ヤンデレ大全



※この企画は、個々人の創作活動に生かすべく「ヤンデレ」というひとつのテーマについて考えを深め合うために行われたものであり、思想・政治的意図を持つものではありません。

<http://p.booklog.jp/book/80604>

著者 : kemmy

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kmit-kemmy/profile>

発行 : 日本大学芸術学部文芸学科 サークルKMIT (ケミット)

URL : <http://kmit.weebly.com/>

作品執筆 : 駒形直規/秋野柊/△ t (でるたていー)

イラスト : ヒロマサ/いちまつ/ハヤシ/めーぷる

表紙イラスト : ヒロマサ

座談会キャスト : 藍那/ゆう/城野/明鏡/らいち/ゆず猫/

長月/野中/△ t /秋野/鈴/池之沼/竹見

発行人 : 松原葵

web project 「ABECHANGE」 HP

<http://kmit-project.weebly.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80604>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80604>

運営会社：株式会社ブクログ